

原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第37集

はる つじ
原の辻遺跡

主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書⑤

2007

長崎県教育委員会

正誤表

頁・行	正	誤
表紙	2008	2007
背表紙	2008	2007
31頁、17行	原の辻遺跡では、弥生時代前葉に…	原の辻遺跡では、弥生時代中期前葉に…

原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第37集

はる つじ
原 の 辻 遺 跡

主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書⑤



Pho. 1 遺跡全景



Pho. 2 池田大原地区 遺構検出状況①



Pho. 3 池田大原地区 遺構検出状況②



Pho. 4 池田大原地区 1号窯下層出土遺物



Pho. 5 不條地区 S X 2 出土遺物

発刊にあたって

本書は主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴い平成18年12月から平成19年3月に実施した、原の辻遺跡の発掘調査報告書です。

原の辻遺跡は『魏志倭人伝』に記される「一支國」の王都として特定されています。弥生時代におけるクニの実体を解明できる稀有の遺跡として、平成12年度に国特別史跡に指定された重要な遺跡です。

今回は遺跡北西側低地部の不條地区、遺跡南西側丘陵部の池田大原地区、遺跡南側の原ノ久保A地区の3地区を調査しました。池田大原地区はこれまでの調査歴が少なく、新たな発見が期待される地域です。原ノ久保A地区では平成8年度の範囲確認調査において弥生時代後期後半から終末期にかけての「一支國」における有力集団の墓域が確認されています。また不條地区では平成10年度來の諸調査において、重要な遺構や遺物の確認がなされています。

今回の調査では、以上のような過去の調査成果を十分に考慮して調査を行いました。

最後に、調査に際して多くのの方々にご協力頂いたことに深謝するとともに、本報告書が研究の一助になれば幸いです。

2008年1月31日

長崎県教育委員会教育長 横田修一郎

例　　言

1. 本書は、主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴って平成18年度に実施した原の辻遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本書は、平成19年度主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う緊急発掘調査の予算にもとづいて発行した。
3. 本書に収録した遺跡の調査地は長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触および石田町石田東触に所在する。
4. 本事業は長崎県壱岐地方局建設部建設課道路班が主体となり、調査主体は長崎県教育委員会が、調査担当は原の辻遺跡調査事務所が行った。
5. 調査組織は下記の通りである。

(1) 平成18年度 ※()の現所属は平成19年9月現在

原の辻遺跡調査事務所 所	長 安楽 勉
係	長 村川 逸朗
係	長 森崎 伸一
文化財保護主事	川畠 敏則
文化財保護主事	寺田 正剛 (現長崎県教育委員会学芸文化課文化財室)
文化財保護主事	林 隆広 ※調査担当
文化財保護主事	溝上 黄稔 ※調査担当 (現長崎県立壱岐高等学校)

(2) 平成19年度

原の辻遺跡調査事務所 所	長 安楽 勉
課	長 宮崎 貴夫
係	長 村川 逸朗
係	長 森崎 伸一
文化財保護主事	川畠 敏則
文化財保護主事	林 隆広 ※報告担当
文化財保護主事	小林 利彦

6. 本書に収録した遺物の実測および製図は原の辻遺跡調査事務所が行った。
7. 本書収録の遺物、図面、写真類は原の辻遺跡調査事務所で保管している。
8. 平面直角座標系は旧日本測地系を使用している。
9. 自然科学分析は古環境研究所に委託した。
10. 本書では原の辻遺跡関連報告書を略称で引用している (Tab. 3 参照)。
11. 本書では挿図図版を Fig.、表組図版を Tab.、写真図版を Pho. で表記している。
12. 本書の執筆および編集は林が行った。

遺跡内に設置された既存の基準点について、平成14年度4月1日の測量法の改正に伴い壱岐地区に高さの基準である国家水準点が設置され、標高の観測を再度実施したところ、0.417mの比高差があったことが判明した。したがって、平成17年度の調査および報告書から-0.417mの修正を行った新しい標高値を採用するものとする。

本文目次

I 章 遺跡の立地する環境	
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	2
II 章 調査に至る経緯	
1. 原の辻遺跡における調査経緯	6
2. 本事業調査の経緯	7
III 章 調査	
1. 不條地区	9
(1) 調査概要	
(2) 基本層序	
(3) 遺構と遺物	
①塗 (SD3・SD5)	
②溝状遺構 (SD1・SD2・SD4)	
③土坑 (SX1・SX2)	
(4) 総括	
2. 池田大原地区	17
(1) 調査概要	
(2) 基本層序	
(3) 遺構と遺物	
①1号塗	
②2号塗	
③不明遺構	
④ビット群	
(4) 総括	
3. 原ノ久保地区	32
(1) 調査概要	
(2) 基本層序	
(3) 遺構	
(4) 総括	
附録 自然科学分析	39

挿図(Fig)目次

- Fig. 1 壱岐島の位置図 1
Fig. 2 壱岐島内主要遺跡分布図 5
Fig. 3 調査地区位置図 6
Fig. 4 不條地区遺構配置図 7
Fig. 5 池田大原および原ノ久保地区
遺構配置図 8
Fig. 6 不條地区全体図 9
Fig. 7 不條地区遺構図および土層断面図 10
Fig. 8 不條地区 S D 3 出土遺物図 12
Fig. 9 不條地区 S D 5 出土遺物図 12
Fig. 10 不條地区 S D 1 出土遺物図 12
Fig. 11 不條地区 S D 2 出土遺物図 13
Fig. 12 不條地区 S D 4 出土遺物図 13
Fig. 13 不條地区 S X 1 出土遺物図 14
Fig. 14 不條地区 S X 2 出土遺物図 15
Fig. 15 池田大原地区全体図および
基本土層断面図 18
Fig. 16 池田大原地区 1 号濠遺構図
および土層断面図① 20
Fig. 17 池田大原地区 1 号濠遺構図
および土層断面図② 21
Fig. 18 池田大原地区 1 号濠
上層出土遺物図 22
Fig. 19 池田大原地区 1 号濠
下層出土遺物図① 23
Fig. 20 池田大原地区 1 号濠
下層出土遺物図② 24
Fig. 21 池田大原地区 1 号濠
下層出土遺物図③ 25
Fig. 22 池田大原地区 1 号濠
下層出土遺物図④ 26
Fig. 23 池田大原地区 2 号濠・不明遺構図
および土層断面図 28

- Fig. 24 池田大原地区 2 号濠出土遺物図 28
Fig. 25 池田大原地区不明遺構出土遺物図 29
Fig. 26 池田大原地区ピット群図 30
Fig. 27 原ノ久保地区全体図 32
Fig. 28 原ノ久保地区濠土層断面図 32

表組(Tab)目次

- Tab. 1 壱岐・対馬面積比率表 1
Tab. 2 壱岐島内遺跡・史跡一覧表 5
Tab. 3 調査区・報告書対応表 7
Tab. 4 池田大原地区 1 号濠出土
亮形土器口縁部時期別集計表 31
Tab. 5 土器観察表① 33
Tab. 6 上器観察表② 34
Tab. 7 土器観察表③ 35
Tab. 8 土器観察表④ 36
Tab. 9 石器観察表 36

写真(Pho)目次

- Pho. 1 遺跡全景
Pho. 2 池田大原地区 遺構検出状況①
Pho. 3 池田大原地区 遺構検出状況②
Pho. 4 池田大原地区 1 号濠下層出土遺物
Pho. 5 不條地区 S X 2 出土遺物
Pho. 6 池田大原地区 基本層序 37
Pho. 7 池田大原地区 1 号濠土層断面 37
Pho. 8 池田大原地区 1 号濠完掘状況 37
Pho. 9 池田大原地区 2 号濠土層断面 37
Pho. 10 池田大原地区 2 号濠および不明遺構
完掘状況 38
Pho. 11 池田大原地区 作業風景 38
Pho. 12 不條地区 S X 2 遺物出土状況 38
Pho. 13 不條地区 作業風景 38

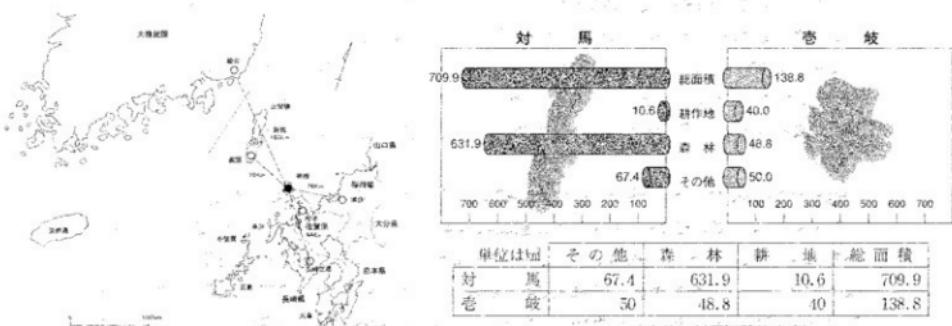
I章 遺跡の立地する環境

1. 地理的環境

「…又南に一海渡る千余里、名付けて瀬海と曰い、一大國に至る。官は卑狗といひ、屬官は卑奴母離と曰う。方三百里可、竹林や蘿林を多くし、三千許の家が有る。差に田地を有し、田を耕しても猶食に不足し、同じように船に乗りて南北に市羅している…」

このように「魏志倭人伝」に記される壱岐は対馬同様、大陸と日本を結ぶ飛び石のように玄界灘に浮かぶ島である。南北約17km、東西約15kmのやや南北に長い本島のほか多くの属島からなり、総面積約138.8km²、人口は約3万2千人を数える。本土との交通手段は海上交通が主で、福岡県博多と佐賀県唐津へ船便が結ばれている。長崎県には直通の交通手段が空路しかないため、行政区画としては長崎県に属するものの文化的、経済的には福岡県とのつながりが深い。

島全体の地形は比較的平坦な溶岩台地で、最高峰の岳の辻傍でも標高213mにすぎない。これは『魏志倭人伝』で「…居る所純島…土地は山険しく、深林多く、道路は虞鹿の徑の如し…良田無く…」と記される対馬とは対照的である。「魏志倭人伝」では「…田を耕しても猶食に不足し…」と記されるが、島東部の深江田原は県内第一の沖積平野で、今日では圃場整備も進み、有数の穀物畠となっている。原の辻遺跡はこの中心部に位置し、南から延びた舌状の台地（標高18m）を中心に約100haの規模を誇る。また遺跡北部には島内最長の幡鉢川（約8.8km）が流れ、東へ約1.5km進むとやがて内海湾に注ぎ込む。この幡鉢川では圃場整備に伴う河岸整備が行われる近年まで高潮の週上がみられ、また遺跡より約2km上流には「船橋」という地名が残っていることから、太古より水上交通として機能していたことが想像される。



Tab. 1 壱岐・対馬面積比率表

Fig. 1 壱岐島の位置図

2. 歴史的環境

奄岐における旧石器時代の遺物は名切遺跡、松崎遺跡、鶴田遺跡など島内の数カ所で確認されている。また原の辻遺跡からは昭和50年（1975）に台形石器・ナイフ型石器・細石器・細石核などが広範囲にわたり出土した。特に台形石器は始良火山灰（AT）降灰直後の石器組成の重要な器種として「原の辻型台形石器」と呼称されることとなり、時期は剥片尖頭器との共伴からナイフ形石器文化中期後半におくことができる。また平成3年（1991）には遺跡丘陵西側の水田下180cmの腐植土層からナウマン象の臼歯が出土している。ナウマン象と旧石器の共伴は確認されていないが、絶滅した動物化石とそれを狩猟した人類の遺物が同時に出土した例は全国でも長野県野尻湖遺跡などがあるにすぎず、原の辻遺跡はその例に追加される可能性もある。

奄岐における縄文時代の遺跡は鎌崎遺跡、名切遺跡、松崎遺跡などで奄岐島西側に集中し、しかも海岸部に立地して干潮時に遺跡が現れる、いわゆる潮間帯遺跡が多いことが特徴としてあげられる。鎌崎遺跡は表面採集ではあるが良好な石鉈やスクレーパーなど特徴ある石器が確認されており、特に全体を直角三角形状に整形して底辺にゆるい弧状の刃部を作り出すスクレーパーは「鎌崎型スクレーパー」と呼ばれ、九州北西沿岸部のみならず朝鮮半島南岸の東三洞貝塚でも出土している。

奄岐における初めての縄文遺跡発掘の事例となった名切遺跡では、昭和58年（1983）に長崎県教育委員会によって発掘調査が行われた。この遺跡からは中期から晩期に造られた貯蔵穴30基が確認され、底面からカシの実など堅果類が、上面からは人頭大の縄や石皿が出土している。形状の多くが円形筒型で、なかにはフラスコ状のものもある。湧水が見られる遺跡の立地状況から、貯蔵と灰汁抜きの兼用が考えられよう。縄や石皿は堅果類を豊富に詰め、それに板材で蓋をした際の重しとしたのだろう。多様な石器も出土しており、漁撈・狩猟・植物採集活動を裏付ける多くの資料を得ることとなった。剥片石器の素材は黒曜石が多いが、奄岐産の黒曜石の他に佐賀県伊万里市腰岳産の良質な黒曜石もみられる。

また松崎遺跡では幾何学的網線刻文をもち、滑石粉末を混入した縄文前期の土器が確認されている。この種のものは韓半島の櫛目文土器との関連が指摘されている。

このように確認された石器や貯蔵穴などから、これらの縄文時代の遺跡が生活の糧を海にのみ求めるのではなく、多様な生活を営んでいたことがうかがえる。また海上交流の活発さも物語っており、対馬海峡を舞台にした九州北部と朝鮮半島を結ぶ海上交流が、後の船作伝播の経路となったことを想起させる。

弥生時代の遺跡は、奄岐島内で約60カ所が周知されているが、なかでも遺跡の規模、出土品の質量から突出するのが原の辻遺跡である。この遺跡は大正時代に発見され、その後の河川改修工事や耕地整理に伴って大量の土器や中国製銅鏡などが、また東亜考古学会による学術調査では貨幣が出土するなどして学術的に重要な遺跡として認知されるようになった。今日までの調査で遺跡面積100ha、3重の環濠を備え、石積みの船着き場などを有する大規模な集落であることが判明している。また『魏志倭人伝』に記載された記事と国名が一致する唯一の遺跡と特定され、平成12年には国特別史跡に指定されている。

車出遺跡は幡ヶ浦川の約5km西側の上流にある山間部の狭い平野に所在する。この遺跡からは方格規

矩鏡や貨泉、卜骨などの祭祀に関わる遺物が出土している。この遺跡の側には後に旧式内社の壱岐一の宮と称される天手長男神社が鉢形山山頂に営まれるため、この地が太古から祭祀的な空間として機能していたことが想像される。

カラカミ遺跡は標高70mを超える丘陵部に位置する遺跡で、鉄製釣針や鯨骨製アワビオコシなど漁撈に關わる特徴的な遺物が出土することから、農耕文化を如実に示す原の辻遺跡とは古くから対比されてきた。しかし勝本町教育委員会が実施した発掘調査（昭和57～60）では銅鏡や卜骨などが出土し、また環濠を備えている点などから原の辻遺跡との関連も指摘されるようになった。朝鮮半島から舶載された瓦質土器や滑石混土器も確認されており、海を糧に生活したこの集落の性格がうかがえる。

車出遺跡、カラカミ遺跡両者とも遺跡の存続期間は原の辻遺跡と趨勢を同じくしており興味深い。あるいはこのいずれかが原の辻遺跡とは役割を分かつ合った、すなわち祝術・祭祀のためのみに営まれた集落で、「卑狗」が統べる原の辻遺跡に対して「卑奴母離」が治める祭祀的な空間であったかと思われるが、これは想像の域を出ない。

祭祀的な遺跡としては、天ヶ原セジョウ神遺跡をあげることができる。この遺跡は壱岐島の北端部に位置し、昭和36年（1961）、護岸工事の際に3本の中広銅矛が出土している。おそらくは朝鮮半島や大陸との境界を意識したもので、外的の侵攻を防ぐ目的と、航海の安全を祈る目的で埋納されたものと思われる。

現在確認されている壱岐島内の古墳は265基にのぼるが、編年的に4世紀までを遡るものはない。現在周知されている古墳では大塚山古墳が最も古く、5世紀後半頃に比定されているが、大部分が6世紀から7世紀に築造されたものである。形状は円墳が主で、これら古墳のうち90余基が壱岐島のほぼ中央部に集中している。これは一地方の古墳群としては突出した規模と内容であり、しかも各古墳の間には同じ設計図が使用されたと思われるほどの類似性が見られることは大きな特徴といえる。

鬼の窟古墳は県下最大の円墳で、石室は玄室・中室・前室からなり17mと長い。この古墳の西に位置する塙塚古墳も石室は15mと長く、その構造や構築方法は鬼の窟古墳と同じであり、その強い類似性は特筆される。県下最大の前方後円墳である双六古墳もこの古墳群にある。全長91m、玄室・前室・羨道からなる石室は全長11mをはかり、自然地形を利用して版築した2段築成である。調査により石室内から金製品、金銅製品、青銅製品、鉄製品、ガラス玉や須恵器・土師器・中国二彩陶器（北齊）などの遺物が確認されている。

古代、律令体制下では壱岐は対馬同様に一国（下国）として扱われ、壱岐・石田の2郡が置かれた。從って国府が置かれ、やがて國分寺が設置されるのだが、壱岐では新たに建設する経済基盤がなかつたのか、壱岐直の氏寺を國分寺に転用した旨が『延喜式』（玄蕃奏）に書かれている。その記録には「壱岐鷦直氏寺為島分寺。置僧五口」とあり、僧二十口が置かれた諸國の國分寺に比べて規模が小さく、そのため鷦分寺と呼ばれることになる。この鷦分寺の調査では平城様式の軒丸瓦と軒平瓦が少量確認されている。平城宮では第Ⅰ期（和銅元年～養老五年）に使用され、同范資料では大和大安寺などで出土している。このことは壱岐直が朝廷から范木を下賜されたことを想像させる。壱岐直は宮城と同じ瓦で氏寺の甍を飾ったのだろうか。

古代の遺跡としては串山ミルメ浦遺跡をあげることができる。ここではト古に使用された海亀の甲

羅や、大量の舶船が出土している。龜卜は壱岐島内の弥生時代遺跡では確認されていないが、卜骨から引き繼がれた卜占の伝統が感じられる。また舶船はここが調の加工場であったことを想像させる。

なぜ壱岐に多くの巨石古墳が存在するのか、その理由は古代の様子から想像することができる。まず壱岐には卜占の伝統が弥生時代から受け継がれており、やがて律令時代には卜部として朝廷における重要な職掌を担うに至ったことである。また壱岐は太古より海を生活の糧としているため海上交易に精通した海人族としての性格も併せ持っている。6世紀におこった朝廷と筑紫同弊井との戦いでは、朝鮮半島西岸、新羅付近の制海権を掌握していた弊井勢力を伊吉島造が駆逐したと『旧事記』の国造本紀に記録されている。朝鮮半島と朝廷との仲介をなしうる壱岐の勢力に対して朝廷から何らかの恩賞があったはずで、おそらくはそれを背景に古墳造営が行われたと思われる。

国境の島としての過酷な境遇は古代より壱岐に大きな禍根をもたらした。白村江の戦い（663）では多くの壱岐の民が散発されて海の藻屑と消えたであろうし、寛仁三年（1019）の刀伊の入寇では壱岐島守藤原理忠をはじめ多くの住民が殺害または捕囚された。

鎌倉時代には文永・弘安の役、すなわち蒙古襲来（元寇）を受ける。鎌倉武士団の活躍や神風などが叙情詩的に語られる反面、多くの住民が殺戮された。

室町時代の壱岐は「三島の倭寇」の一つとして知られる。三島とは壱岐・対馬・松浦（松浦は島ではない）のこと、倭寇とは14世紀から16世紀にかけて朝鮮半島や中国大陸沿岸で活動した海賊的集団のことである。この背景には南北朝並立から始まる全国的な戦乱がある。もともと農業生産力が低い「三島」は戦乱の影響で生活物資を海外との交易（私貿易）に求めねばならなくなり、しばしば略奪行為を行うようになるのである。鎌倉期を通じて壱岐対馬の守護職であった少貳氏に代わり、この頃壱岐は松浦党五氏（志佐・佐志・呼子・鴨打・塩津留）によって分割統治されたと『海東諸國記』（1471）にある。この中に「唯多只（湯岳）郷、志佐代官源武、之を主（つかさど）る。戊子年（1468）、國書（李朝が授給した銅印）を受け歲遣一、二船を約す。書に「岐守護代官真弓兵部少輔源武と称す」とあり、志佐氏が真弓氏を代官として活発な交易を展開していたことがうかがえ、この交易は三浦の乱（1510）まで続けられたとされる。原の辻遺跡の西約1kmに位置する観城は真弓氏の居城と思われ、発掘調査では14世紀頃の高麗象嵌青磁・青釉沙器などが出土している。その後文明四年（1472）に肥前上松浦の岸岳城主である波多氏が壱岐に侵攻する。その際、松浦党五氏の代官衆が観城で籠城・降服したといわれるが、先述の通り波多氏による壱岐領有後も志佐氏による朝鮮貿易は活発に行われていることから、壱岐の主導権移行はより複雑であったことが想起される。その波多氏も内紛から日高・松浦氏に倒され、平戸を本拠とする松浦氏による壱岐統治が開始される。

松浦氏による壱岐統治が開始された頃、長く続いた戦国時代も終焉を迎える。九州征伐の際、豊臣秀吉のもとへ参陣した松浦氏は領地を安堵される。文禄元年（1592）からはじまる朝鮮出兵（文禄・慶長の役）では、松浦氏は第一軍の小西行長配下に編成され、三千の軍勢で渡海している。またその前年には秀吉の命を受けて勝本城を築城している。『壹岐名勝圖誌』に「夜の中に手々に石を持上がり築けり」とあるように、突貫工事で築城したものと思われる。現在は勝本浦に向かって開かれた外掛形虎口や、その搦手となる虎口などの遺構が残されている。

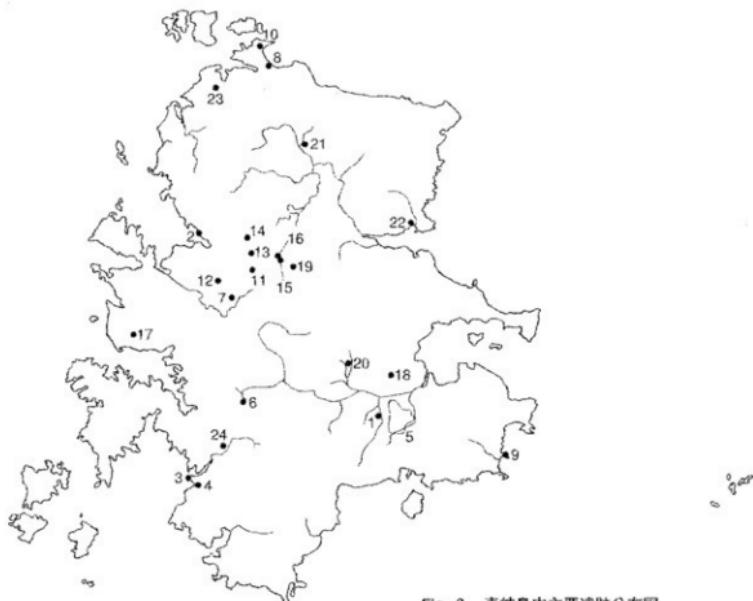


Fig. 2 壱岐島内主要遺跡分布図

番号	遺跡名	主な出土品 備考	主な報告
1	鶴田遺跡	手石器（石核・ブレーク・ライフ砍石器） 魚骨の埋蔵遺存 独創性抜きの類似が因縁される	長崎県教育委員会（1996）
2	松原遺跡	神土器・陶文土器・石核	長崎県教育委員会（2003）
3	鍋崎遺跡	平瀬作遺跡 漢文瓦頭部・鐵丸時代手形明の隕手馬新石器時代土器が出土する	積山耕・田中直之（1979）
4	名前遺跡	神土器・陶文土器・石器	長崎県教育委員会（1995）
5	原の辻遺跡	土器・石器・陶片・鐵丸等	長崎県教育委員会
6	車持遺跡	陶器上部・輪郭片・ガラス玉 丹波金持鏡・芯多く出土	美輪麻・鈴木信司教育委員会（1998）
7	カラカミ遺跡	陶土上部・男特徴・下部 海生的特徴をもつて城壁も見える	長崎県教育委員会（1985）
8	火ヶ原セジョウ神道跡	神子	長崎県教育委員会（1985）
9	大久保跡	乳生土器・鹿角器 47個骨・竹井男性の全骨が出土	長崎県教育委員会（1986）
10	山川ミルヌ浦余跡	土器・石器・陶器・全骨等・骨・竹筒器 野川の口・空堀・廻手場跡・人骨等が出土していることから千葉・山川・竹筒器を中心と推測	長崎県教育委員会（1986・1989・1990）
11	京六古墳	竹筒器・漆器・骨器・竹筒器等・二重構造 竹筒器・漆器・骨器等・竹筒器等43件・高さ10.6mに西方部傾斜に高さ5.5m・擴穴式石室（全長18.6m・玄室・前室）	長崎県教育委員会（1986）
12	対馬尾古墳	前方後円墳・全般的傾向は島内後円墳類に近似（前方部傾斜）・椭穴式石室（全長9.4m・玄室・前室）	長崎県教育委員会（1990）
13	椎原古墳	漆器器・土器類・陶質土器・漆器等の漆器類	長崎県教育委員会（1990）
14	悟水古墳	竹筒器・土器類・陶器等・全殻・漆器等 円筒形・漆器等30件・高さ7.7m・椭穴式石室（全長18.6m・玄室・中室・前室）	長崎県教育委員会（1992）
15	鬼の窟古墳	漆器器・陶質土器・漆器等 円筒形・高さ12.7m・椭穴式石室（全長16.5m・玄室・中室・前室）	長崎県教育委員会（1990）
16	兵庫古墳	円筒形（直径3.6m・高さ5.5m）・椭穴式石室（全長12.5m・玄室・中室・前室）	長崎県教育委員会（1989）
17	鬼屋森古墳	埴生屏風・石窓等も半埋しており四方向など不明・船石に船の形跡あり	川村義一・本村徹太郎（1982）
18	大塚山古墳	円筒形・漆器等 円筒形・漆器等21件・櫛穴式石室（全長3.95m）	長崎県教育委員会（1987）
19	佐助鳴寺寺跡	瓦・穿孔器・土器類・陶質土器 奈良瓦器等82件・櫛穴式・圓窓の特徴・軒片瓦が出土	芦辺町教育委員会（1991～1994）
20	櫻城跡	輪入陶器群 櫻城窯古瓦の佐助瓦代高見瓦の焼成・櫻城瓦質の拠点	長崎県教育委員会（1997）
21	文永の役新城古跡	文永の役における城跡・佐助瓦代平素壁から焼成	—
22	弘安の役裏山跡	弘安の役における焼成場・佐助瓦代少底瓦等から焼成	—
23	藤本城跡	焼成出島時に薩摩秀吉の命で焼成された焼成場・其跡や御溝渠	—
24	地正城跡	很多多角形が構成した城跡・程程からの在来の中期	—

Tab. 2 壱岐島内遺跡・史跡一覧表

II章 調査に至る経緯

1. 原の辻遺跡における調査経緯

原の辻遺跡は大正年間に松本友雄によって発見された。その後の河川工事や耕地整理の際に大量の土器や中国製鏡などが確認され、遺跡の重要性が認識されるようになった。昭和26~36年(1951~1961)には京都・九州大学を中心とする東亜考古学会によって学術調査が行われた。初の本格的な発掘が行われたこの調査では各種鉄製品や貨泉、あるいは韓半島系や楽浪系土器が出土したことから大陸との関連が強い遺跡として学界で注目を集めた。反面、地元における遺跡への関心は低く、やがて遺跡の位置する丘陵周辺では畠地から水田への転換が進められた結果、遺跡はかなりの損壊を受けた。昭和49年(1974)には石田大原地区において、水田化改良工事にともなう発掘調査によって墓域が確認された。

この墓域は弥生時代前期末から中期を中心とする箱式石棺墓および盃形石棺墓から構成されており、区画溝を伴う本格的な墓域として注目された。この調査を受けて昭和50~52年度(1975~1977)に範囲確認調査が実施され、遺跡の範囲が舌状台地の南側まで広がることが確認された。平成に入るとなだれ谷川流域総合整備事業にともない、舌状台地周辺の低地部を中心に広範囲な発掘調査が行われた。これにより原の辻遺跡が台地周辺の低地部に幾重にも環濠を巡らす、遺跡規模約100haにもおよぶ大規模環濠集落であることが判明した。平成7年(1995)以降は集落構造の把握を目的とした範囲確認調査が実施された。これまでの調査により環濠の外側に墓域が確認され、丘陵上の調査においては多数の竪穴住跡とともに、丘陵の最高地から掘立柱建物を中心とする祭儀場跡が発見された。また低地部の調査も継続して行われ、複雑に巡る環濠の様相が明らかになるとともに、各年度の調査で確認された環濠間の繋がりについて検討可能な基礎資料を得ることになった。

また旧芦辺町教育委員会によって平成11年(1999)から、また旧石田町教育委員会によって平成13年(2001)から遺跡整備にともなう発掘調査が行われている。旧芦辺町は丘陵部を中心に調査を行い、



Fig. 3 調査地区位置図 (1/12,000)

多数の住居跡を確認するとともに櫛（秤の鍤）や青銅製ヤリガンナ、中広銅矛や鎧型などの重要な遺物を確認している。また旧石田町は大原・大川地区の墓域を中心に調査を行い、墳墓22基、多経細文鏡や細形銅劍などを確認している。この遺跡整備とともに発掘調査は苞岐4町（他に郷ノ浦町と勝本町）の合併（平成16年3月）により誕生した壱岐市教育委員会に引き継がれている。

2. 本事業調査の経緯

主要地方道勝本石田線は遺跡の丘陵部西側を南北に走るが、舗装が狭く朽化も進んでいるため、改良工事に向けての協議が平成5年度（1993）から行われた。改良工事に当たっては既存の県道を拡幅する案も検討されたが、丘陵部では重要な遺構が出土する可能性もあり、また将来的に遺跡整備を行う際の支障となる恐れがあることから、丘陵西側低地部に新たに取り付けることになった。

その間、遺跡の発掘調査では船着き場跡などの重要遺構が次々に発見され、平成9年（1997）には国史跡となり、その後の平成12年（2000）には異例の早さで国特別史跡に指定されるに至った。

県道改良工事に伴う調査は平成14年度（2002）に着手し、2,400m²の調査が行われた。当初3,200m²の予定であったが、水利権が解決していないため調査できない区域が約600m²存在している。この区域については工事着手直前に調査を行うことで壱岐地方局建設部建設課道路班と合意している。このH14県道調査【福田・小玉2004】では遺跡西側低地部が調査され、環濠1条・河道2条・溝1条などが確認されている。続くH15県道調査【林2005】においても同じく遺跡西側低地部3,100m²の調査が実施され、河道3条・溝状遺構9条・護岸遺構1基・樹皮敷遺構1基・祭祀土坑1基・水田遺構（畦畔）1基・集石遺構1基・小堀塗墓1基などが確認されている。H16県道調査【林2006】では原ノ久保A地区の調査を行い、溝状遺構1条・住居跡1基・不明遺構1基・埋甕遺構1基・ピット群などが確認されている。H17県道調査【林2006】では安国寺A地区の調査を行い、河道跡1条などを確認している。

番号	所在地名	調査名	面積	発行機関
1	原ノ久保A地区	原ノ久保地区遺跡調査（第4回）	2,400m ²	原ノ久保地区遺跡調査実行委員会
2	昌吉西側	昌吉地区遺跡調査（第1回）	198m ²	昌吉地区遺跡調査実行委員会
3	丘陵低地	丘陵低地遺跡調査（第1回）	600m ²	長崎県教育委員会
4	江波地区	江波地区遺跡調査（第1回）	100m ²	長崎県教育委員会
5	丘陵低地	丘陵低地遺跡調査（第2回）	820m ²	長崎県教育委員会
6	丘陵低地	丘陵低地遺跡調査（第3回）	200m ²	長崎県教育委員会
7	丘陵低地	丘陵低地遺跡調査（第4回）	200m ²	長崎県教育委員会
8	昌吉南側	昌吉地区遺跡調査（第1回）	200m ²	長崎県教育委員会
9	河川流域	河川流域遺跡調査（第1回）	200m ²	長崎県教育委員会
10	丘陵低地	丘陵低地遺跡調査（第2回）	200m ²	長崎県教育委員会
11	丘陵低地	丘陵低地遺跡調査（第3回）	200m ²	長崎県教育委員会
12	丘陵低地	丘陵低地遺跡調査（第4回）	200m ²	長崎県教育委員会
13	丘陵低地	丘陵低地遺跡調査（第5回）	200m ²	長崎県教育委員会
14	丘陵低地	丘陵低地遺跡調査（第6回）	200m ²	長崎県教育委員会
15	丘陵低地	丘陵低地遺跡調査（第7回）	200m ²	長崎県教育委員会
16	丘陵低地	丘陵低地遺跡調査（第8回）	200m ²	長崎県教育委員会

Tab. 3 調査区・報告書対応表

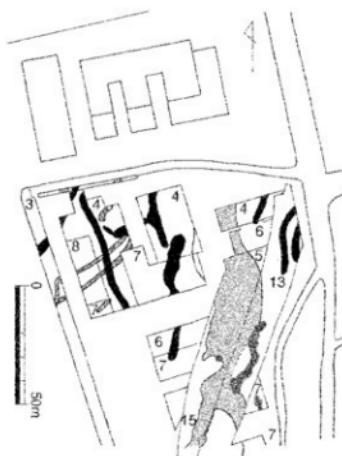


Fig. 4 不條地区遺構配図（1/2,000）

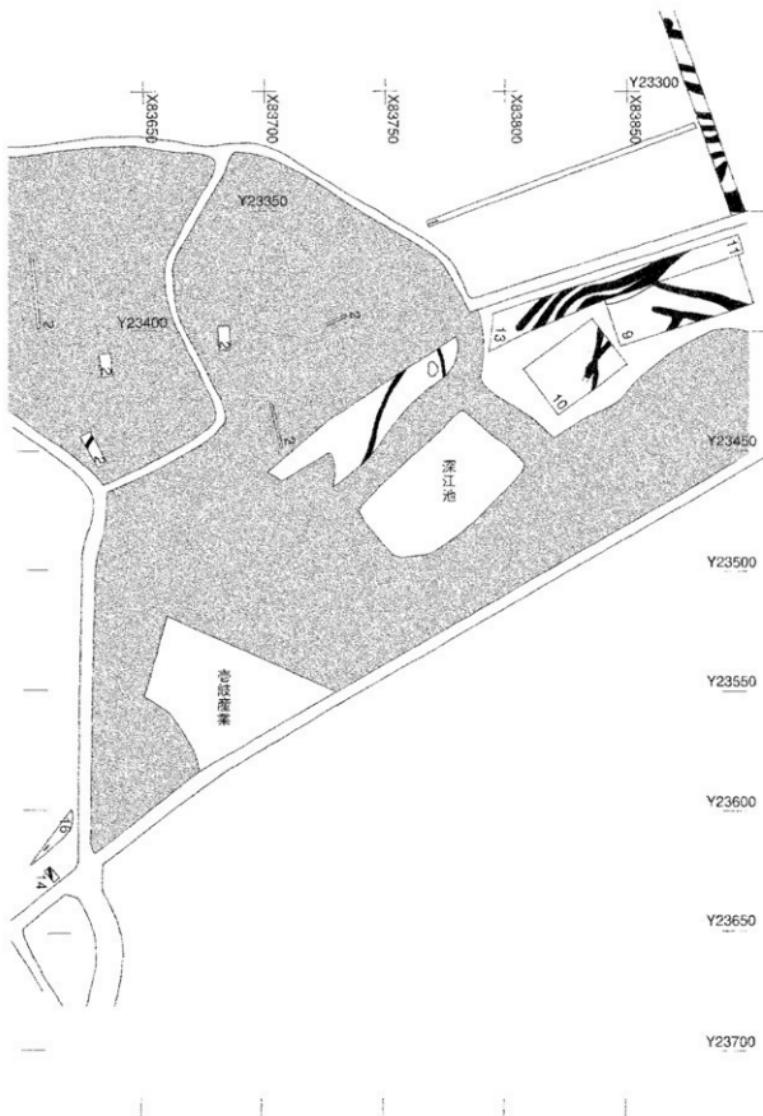


Fig. 5 池田大原および原ノ久保地区地図 (1/2,000)

III章 調査

1. 不條地区

(1) 調査概要

不條地区は県道工事に付随する側溝埋設工事における工事立会である。この際に前期を主体とする遺物が出土したため調査を行った。調査期間は平成19年1月30日から同年2月5日の5日間を要した。調査面積は側溝埋設予定地のうち92m²である。

この不條地区ではH10特定調査[杉原1999]、H12特定調査[杉原2001]、H12国補調査[安楽2001]など数次にわたる発掘調査が行われている。これら調査では環濠8条、溝5条、河川跡1条、土坑などの遺構が確認されている。

今回の調査では濠を2条(SD3・SD5)、溝を3条(SD1・SD2・SD4)、土坑を2基(SX1・SX2)、ピットを12基それぞれ確認した。これら遺構と過去の調査で確認された遺構のつながりを想定すると、SD3とH10特定調査における4号濠が繋がると思われる。それ以外の遺構については繋がりを想定できなかった。

(2) 基本層序

不條地区的基本層序は4層からなる。1層は造成土である。2層の色調は褐灰色(12YR6/1)で黄褐色の鉄分を混入する。3層の色調は暗灰色で、砂を混入する粘土層である。4層の色調は暗褐色(10YR3/4)で、いわゆる基盤(地山)層である。

(3) 遺構と遺物

遺構は検出規模および充填土(堆積状況)の説明を行い、その後に遺構の検討を若干行っている。また遺物についてはその特徴を説明し、時期判断については『原の辻遺跡総集編I』「V遺物」[福田・中尾2005]を参照した。遺物の詳細な観察はTab. 5～6およびTab. 9を参照されたい。

①濠

SD3

幅2.4m、深さ0.7mを測る。断面はU字を呈する。遺構充填土は3層からなる。上層(SD3①)の色調は褐灰色(10YR5/1)でマンガンが多く砂質に富む。中層(SD3②)の色調は褐灰色(10YR5/1)で粗い粘土層である。層位の下部に炭化物が堆積する。下層(SD3③)の色調は褐灰色(10YR4/1)で粘土層である。H10特定調査[杉原1999]における4号濠と繋がる遺構で、南西-北東の



Fig. 6 不條地区全体図 (1/400)

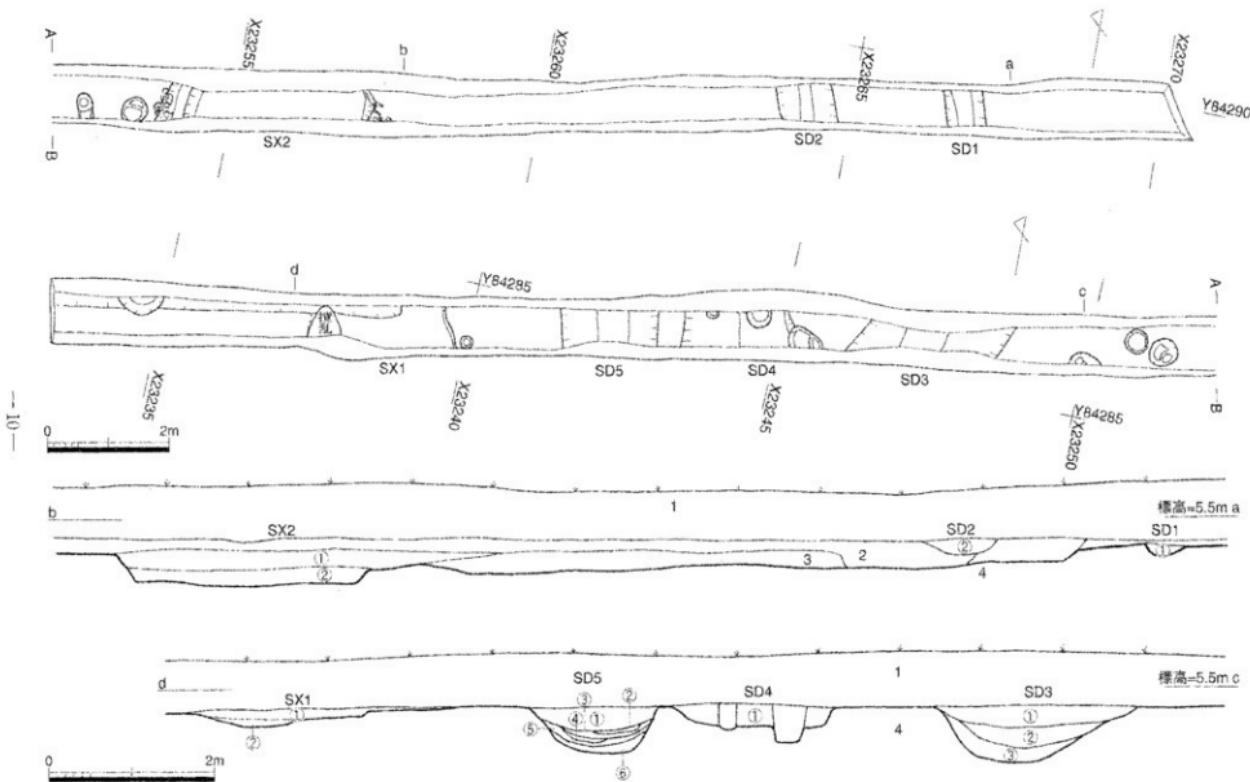


Fig. 7 不條地区遺構図 (1/80) および土層断面図 (1/60)

軸をとる。このH10特定4号窓の出土遺物には弥生時代後期から古墳時代初頭の資料が多いが、今回確認したSD3の出土遺物に弥生時代後期の資料は確認されなかった。

次にSD3の出土遺物を説明する。1～4は壺の口縁部である。1～3は口縁部の断面が「勧先」形となり、口縁部下に1条の突帯を施している。口縁部内側のつまみ出しが明瞭となっている。4は断面が「く」の字形になり、内面には器壁のケズリ痕がわずかに残る。5は壺の底部である。断面は平底を呈する。内面にスス痕のような褐色の付着物が認められる。1～3は弥生時代中期V期（須玖II式新段階）、4は古墳III期に相当する。

SD5

幅1.5m、深さ5.5mを測る。断面は逆台形を呈する。遺構充填土は6層に細分されるが、大まかには3段階の堆積と思われる。上層（SD5①～②）の色調は褐色（10YR4/6）である。中層（SD5②～③）の色調はにぶい黄橙色（10YR6/4）で、層位の下部に炭化物が堆積する。下層（SD5④～⑤）の色調は褐灰色（10YR4/1）で、層位の中間に炭化物が堆積する。

次にSD5の出土遺物を説明する。6～7は壺の口縁部である。口縁部の断面は6が「コ」の字形で、7は「勧先」形を呈する。7は口縁部下に1条の突帯を施し、口縁内側のつまみ出しが明瞭である。8は短頸壺か。9は広口壺で、口縁内側につまみ出しが付く。10は素口縁の広口壺である。11は壺の底部である。12は口縁部に丸い粘土帶を口縁に貼り付けた無文七器（朝鮮半島系土器）の壺である。13は蔽石で、全面に敲き痕が残る。6は弥生時代中期III期（須玖I式新段階）、7は中期V期（須玖II式新段階）、8～10は中期IV～V期（須玖II式）に相当すると思われる。

②溝状遺構

SD1

幅0.5m、深さ0.15mを測る。断面はU字を呈する。遺構充填土は1層で、色調は灰色（N4/）である。出土する遺物は少なく、全体に摩滅を受けたものが多い。耕作土（表土層）の直下から検出され、遺構充填土に含まれる遺物も摩滅したが多いことなどから、弥生時代の遺構ではないと思われる。弥生時代以外の遺物が含まれていないため時期判断が困難だが、おそらく古代から中世にかけての用排水路と思われる。

次にSD1の出土遺物を説明する。14は壺の口縁部で、口縁内側のつまみ出しが明瞭である。15は素口縁広口壺の口縁部である。外面に丹塗りが施される。16は袋状口縁壺の口縁部である。袋状の口縁部には棱線が明瞭に観察される。口縁上面には「十字」の線刻が施されている。

SD2

幅1m、深さ0.2mを測る。断面はU字を呈する。遺構充填土は1層で、色調は灰色（N4/）である。遺物を多く含むが、摩滅したものが多い。SD1同様に、耕作土直下から検出され、摩滅した遺物を多く含むことなどから、弥生時代以降の遺構と思われる。

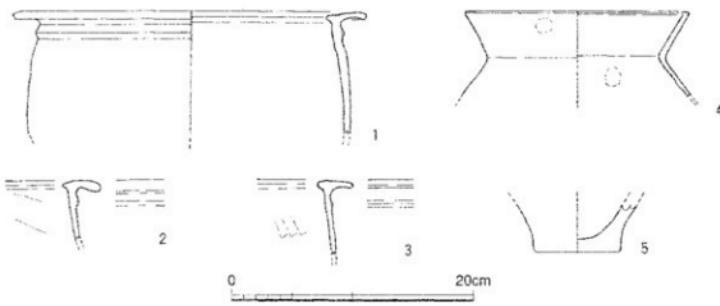


Fig. 8 不條地区 SD 3 出土遺物図 (1 / 4)

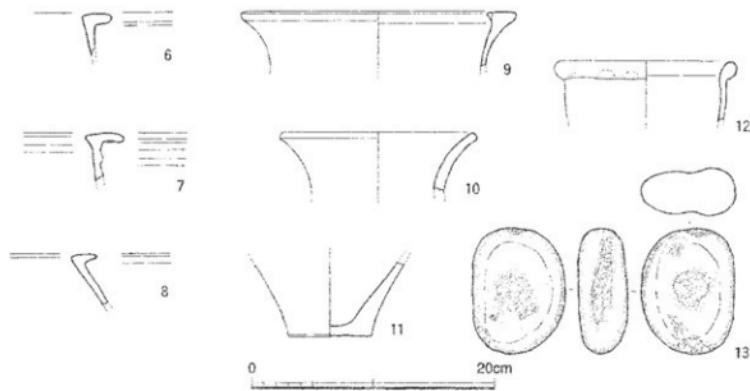


Fig. 9 不條地区 SD 5 出土遺物図 (1 / 4)

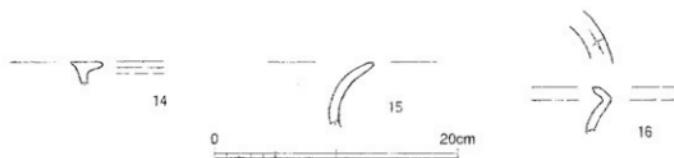


Fig. 10 不條地区 SD 1 出土遺物図 (1 / 4)

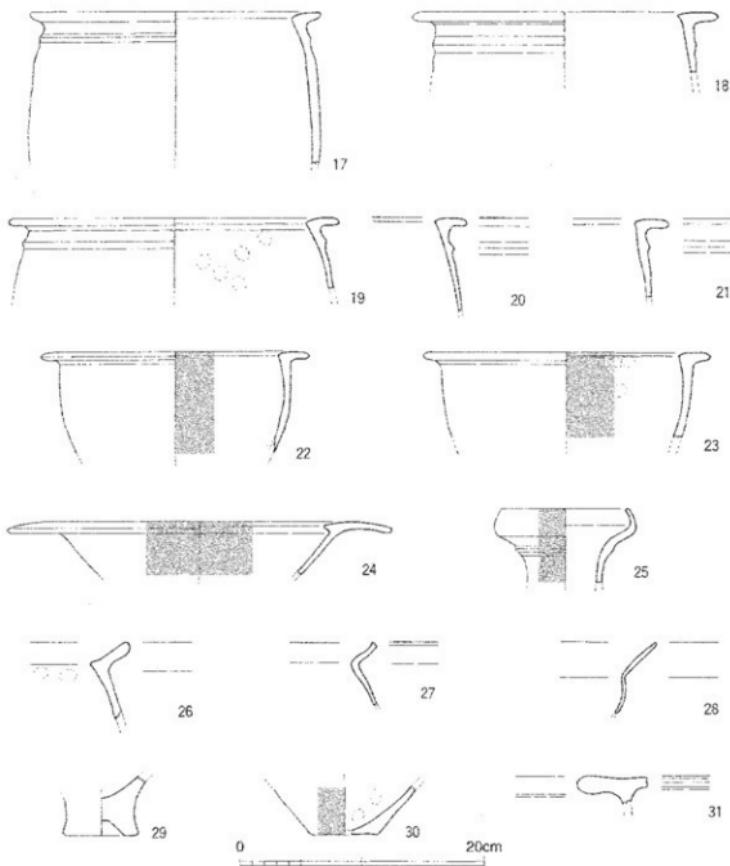


Fig. 11 不條地区 S D 2 出土遺物図 (1/4)

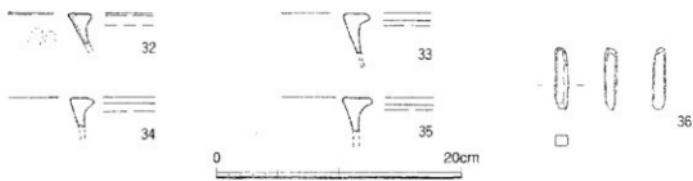


Fig. 12 不條地区 S D 4 出土遺物図 (1/4)

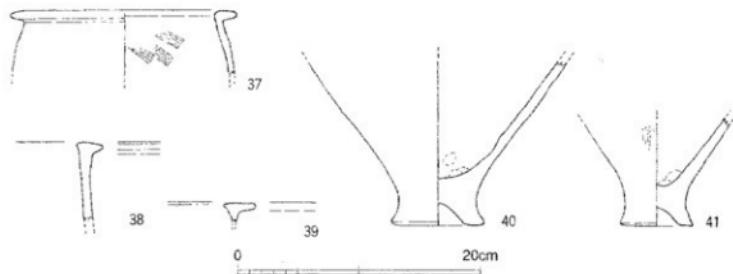


Fig. 13 不條地区 S X 1 出土遺物図 (1/4)

次に S D 2 の出土遺物を説明する。17~21は壺の口縁部である。17は口縁部の断面が「コ」の字形を呈し、口縁先端が上に向く。口縁部下に1条の突帯を施す。18は口縁部の断面が「コ」の字形で先端は水平にのびる。口縁部下に1条の突帯を施す。19~21は口縁部の断面が「鈎先」形となり、口縁部下に1条の突帯を施す。22~23は鉢と思われる。口縁部の断面が「鈎先」形となり、口縁部下に突帯は施されない。ともに内面に丹塗りの跡が残る。おそらく外面にも丹が施されていたのだろうが、摩滅により消滅したと思われる。24は高坏の口縁部である。口縁部の断面が「鈎先」形になり、口縁部先端が下に垂れる。内外面ともに丹塗りの跡が残る。25は袋状口縁壺の口縁部から頸部である。口縁部下に「M字」突帯が施される。頸部には幾重かの「M字」突帯が施されていたと思われるが、欠損の為不明である。外面に丹塗りの跡が残る。26は壺の口縁部である。断面が「く」の字形となり、屈曲部の内側はつまみ出しがなされる。27は壺の口縁部である。断面が「く」の字形となり、口縁部先端をつまみ上げている。28は口縁部の断面が「く」の字形となる鉢である。29は壺の底部である。底が大きく凹み、底の裾部がやや広がる。30は壺の底部である。平底で外面に丹塗りの跡が残る。31は壺棺と思われる大型壺の口縁部である。口唇部の先端が面取りされ、やや凹面となる。口縁部内側のつまみ出しが大きく迫り出す。

S D 4

幅 2 m, 深さ 0.5m を測る。充填土は 1 層 (S D 4 ①層) で、色調は褐灰色 (10YR6/1), 鉄分や砂質を多く含む。溝として報告しているが、落ち込みである可能性も高い。

次に S D 4 の出土遺物を説明する。32~35は壺の口縁部で、口縁部の断面が「三角」形を呈する。36は片刃石斧である。摩滅が激しく、研磨痕は観察できない。

③土坑

S X 1

幅 2.5m, 深さ 0.2m を測る。充填土は 2 層からなり、1 層 (S X 1 ①) の色調は明褐色 (7.5YR5/8) である。2 層 (S X 1 ②層) の色調は暗褐色 (7.5YR3/4) で、炭化物を混入する。遺構の性格は

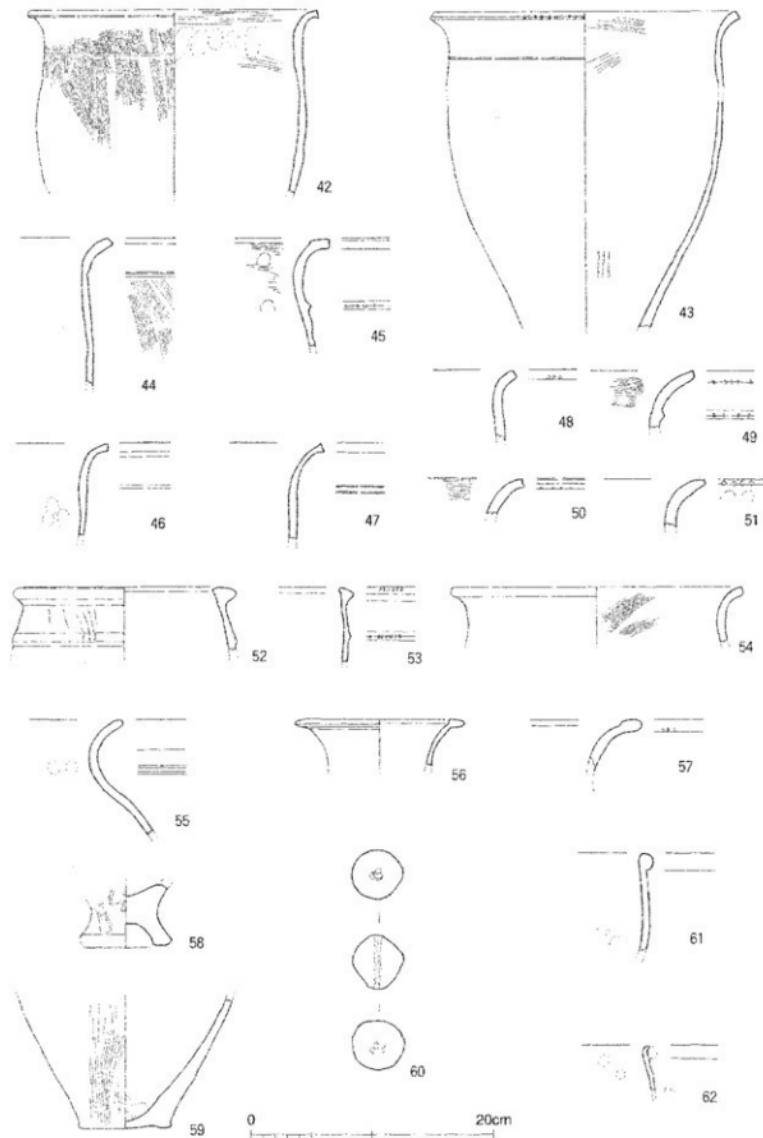


Fig. 14 不條地区 SX 2 出土遺物図 (1 / 4)

部分的な落ち込みと思われる。

次に S X 1 の出土遺物を説明する。37～39は壺の口縁部である。37～38は口縁部の断面が「コ」の字形である。39は口縁部の断面が「鶴先」形である。40～41は壺の底部で、ともに底が大きく凹み、底の裾が広がる。

S X 2

幅4.5m、深さ0.4mを測る。充填土は2層からなり、1層（S X 2①）の色調は褐色（7.5YR4/3）である。砂粒や炭化物、明褐色土粒などを含む。2層（S X 2②）の色調は灰黄褐色（10YR5/2）で、砂粒を多く含む。遺構の掘り方が明瞭であり、床面がほぼ平坦であること、また頁岩破片を多く含むことなどから住居跡とも思われるが確証はつかめていない。弥生時代前期末から中期初頭の土器と無文土器、頁岩片が併存する。

次に S X 2 の出土遺物を説明する。42～50は壺である。口縁部の断面が「如意」形で、緩やかに口縁部が外反する。42は口縁部下に1条の沈線を施す。43は口唇部下端に刻目と、口縁部下に1条の沈線を施す。44は口縁部下に1条の沈線を施す。45は口唇部下端に刻目と、口縁部下に1条の刻目突帯を施す。46は口縁部下に1条の沈線を施す。47は口縁部下に2条の沈線を施す。48は口唇部下端に刻目を施す。49は口唇部下端に刻目と、口縁部下に1条の刻目突帯を施す。50～51は口唇部下端に刻目を施す。52～53は壺の口縁部である。とともに口縁部の断面が「三角」形となる。52は口縁部下に1条の刻目突帯を施す。53は口唇部下端に刻目と、口縁部下に1条の刻目突帯を施す。54～57は壺である。54は素口縁の広口壺である。55は胴部から口縁部にかけて大きく外反しながら湾曲し、断面が「S」字形となる。口縁部下に2条の沈線を施す。56～57は口縁部に粘土を貼り付けた広口壺である。57は口唇部下端に刻目が施される。58～59は壺の底部である。58は底部の断面が大きく「逆凹」字形となり、上げ底状になる。底裾部も広がる。59は底部の断面が平らである。60は土製鍤と思われる。断面はおおよそ球体をなし、手の平で捏ねたような形状を見せ、通し孔が空けられている。61～62は口縁部に断面が丸い粘土帯を貼り付けた無文土器（朝鮮半島系土器）の壺である。62は丸粘土が欠損しているが、無文土器の口縁部である。42～51、54は弥生時代前期Ⅰ～Ⅱ期（板付II b式段階）、52～53、55～58は中期Ⅰ期（城之越式段階）に相当すると思われる。

(4) 総括

塗について、S D 3 がH10特定調査における4号塗とつながることは、両造構の位置関係から確定されると思われる。一方、S D 5 については今後の調査でさらに検討する必要があると思われる。またS X 2において、弥生時代前期末から中期初頭の弥生土器と、断面丸形粘土帯を貼り付けた無文土器（水石里式）を一括資料としてえることができた。この不條地区（約4,000m²）は原の辻遺跡の中でも特に無文土器や擬無文土器が出土する地区で、その数は100数点に及ぶ。この密度の濃さは朝鮮半島系渡来人の存在を示唆していると思われる。

2. 池田大原地区

(1) 調査概要

池田大原地区は県道工事に伴う発掘調査である。調査期間は平成18年12月11日から平成19年3月20日の51日間を要した。調査面積は県道敷設予定地のうち1,545m²である。

この池田大原地区ではH 9国補調査【宮崎1999】が行われている。この調査ではI区より環濠が確認されているが、それ他の調査区では目立った遺構や遺物の検出はなされていない。この背景には、近年の水田造成による土地変更が影響しているのかもしれない。

今回の調査では濠を2条（1号濠・2号濠）、不明遺構を1基、ピットを294基確認した。

(2) 基本層序

池田大原地区の基本層序は5層からなる。1層は水田耕作土で色調は灰黄褐色（10YR4/2）である。2～3層は水田造成時の客土（造成土）で、切り出した土を運んで来たように多種の土がまだら状に混在する。4層は龍頭畑当時（水田造成以前）の耕作土と思われ、色調は黒褐色（10YR3/1）である。5層はいわゆる地山層（基盤層）である。調査区中央に断層があるため色調および土質が途中で異なる。5a層は玄武岩の風化したような土質で、多様な色調が混在する。主な色調は褐色（10YR4/4）である。5b層はよくしまった粘土質の土で、色調はにぶい黄褐色（10YR5/4）である。検出した遺構は、すべて5層に掘り込まれている。

(3) 遺構と遺物

遺構は抜放規模および充填土（堆積状況）の説明を行っている。遺構の検討については(1)總括を参照されたい。また遺物についてはその特徴の説明を行っている。時期判断については『原の辻遺跡総集編 I』『V遺物』【福田・中尾2005】を参照した。遺物の詳細な観察は Tab. 6～Tab. 9を参照されたい。

① 1号濠

おおよそ東西軸に長さ約40m、幅約1mを測る。南東側ほど遺構が深くなることから、北西側は水田造成などで削平されている可能性が高い。断面はU字を呈する。遺構充填土は2層からなる。上層（1号濠①層）の色調は黒褐色（10YR2/2）で、遺構の上面に薄く堆積する。下層（1号濠②層）の色調は褐色（10YR4/4）で、均質な土である。下層は検出した1号濠の全範囲で確認され、かつ厚く堆積しているのに対し、上層は確認されない所もあり、また薄い堆積で対照的である。出土する遺物は上層および、下層の上部地点に多く位置していた。そのため出土遺物は上層と下層に分けて報告した。

次に1号濠上層の出土遺物を説明する。63～69は甕である。63は口縁部の断面が「コ」の字形となり、口唇部先端が口縁の屈曲部よりも高く位置し、口縁部が内側に傾斜する。64も同様であるが口縁部下に1条の突帯を施す。65は口縁部の断面が「コ」の字形となり、口唇部が水平に伸びる。66～68は口縁部の断面が「鉗先」形となり、口縁屈曲部内側のつまみ出しも明瞭となっている。口縁部下に

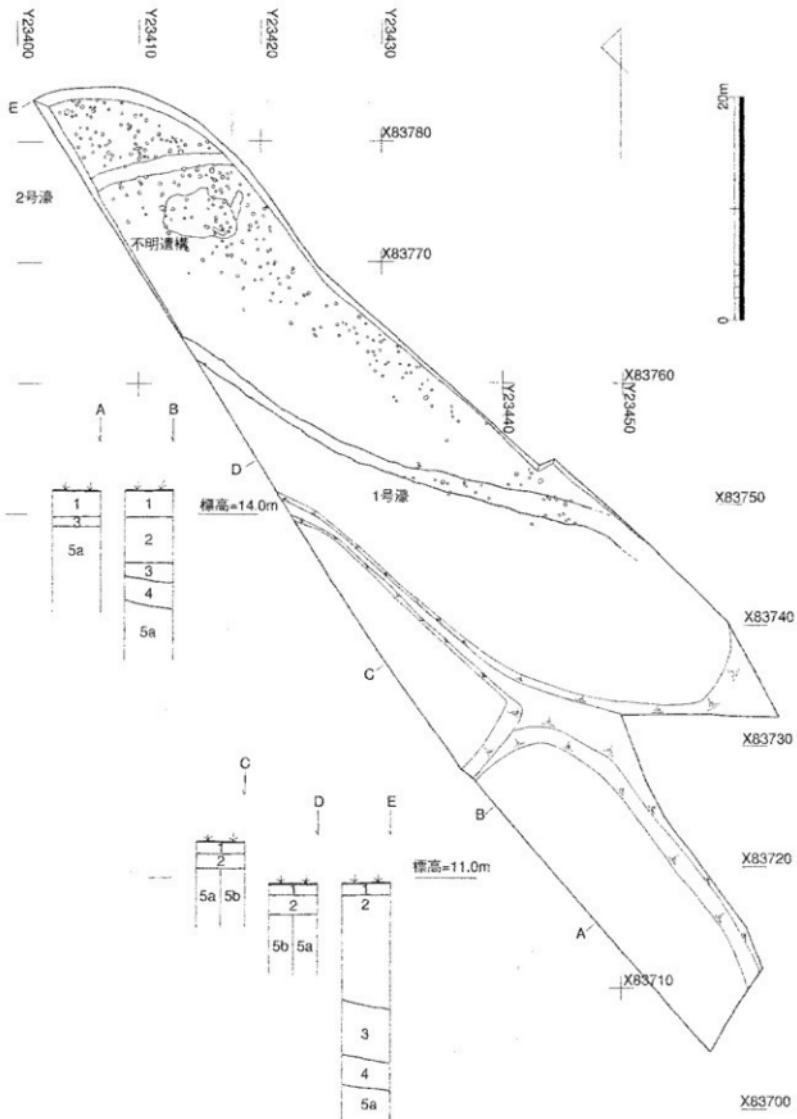


Fig. 15 池田大原地区全体図 (1/400) および基本土層断面図 (1/400)

1条の突帯を施す。69は口縁部の断面が「く」の字形となり、口縁部の先端をつまみ上げる、いわゆる「跳ね上げ口縁」で、時期は弥生時代中期中葉から後葉であろうか。70～72は壺である。70は短頸壺の口縁部である。口縁部の断面が「錐先」形となる。鉱物の混入が少ない良質な胎土を用いて焼成されている。内外面ともに摩滅しているが、丹塗精製土器であった可能性が高い。71も同様に短頸壺の口縁部で、口縁屈曲部の内側につまみ出しがなされる。72は広口壺の口縁部である。口唇部が下方へ湾曲するように（口唇部の上面が凹みながら）伸びる。口唇部先端も意図的に面取りがなされている。73は壺の底部で、底が大きく凹み、底の裾部がやや広がる。74は壺の底部である。鉱物の混入が少ない良質な胎土を用いて焼成されている。内外面ともに摩滅が激しいが、袋状口縁壺などの丹塗精製土器であった可能性が高い。63～65は弥生時代中期Ⅲ期（須玖Ⅰ式新段階）、66～68は中期Ⅳ期（須玖Ⅱ式古段階）に相当すると思われる。

続いて1号濠下層の出土遺物を説明する。75～108は壺である。75～76は口縁部の断面が「三角」形となる。76は口縁部下に1条の突帯を施す。77～80は口縁部の断面が「コ」の字形となり、口唇部先端が口縁屈曲部よりも高く、口縁部が内側に傾斜する。79は内面に丹塗りが施される。79と80は鉱物の混入が少ない良質な胎土で焼成されている。80は明瞭な丹塗りの痕跡はないが、口唇部上面が赤褐色を帯びている。81～86は口縁部の断面が「コ」の字形となり、口唇部が水平に伸びる。81と82は摩滅のためか器壁が薄くなっている。87～100は口縁部の断面がおおよそ「錐先」形で、口唇部先端と口縁屈曲部がほぼ水平となり、口縁屈曲部の内側につまみ出しがなされる。87と88はともにぼけ形に近い状態で出土しており、口縁部下に1条の突帯を施す。89は口縁部から胴部上半にかけて丁寧なヨコナデが施され、胴部にはタテハケメによる調整がなされる。90は口縁部下に1条の突帯を施す。口縁部から突帯にかけてヨコナデによる調整がなされる。91は口縁部上面に3条の線刻が掘り込まれている。線刻の深さは0.5mmほどで、ほぼ平行に並ぶ。鉱物の混入が少ない良質な胎土を用いて焼成されている。92は口縁部上面が広く平坦で、口縁屈曲部内側のつまみ出しが明瞭となっている。93は鉱物の混入が少ない良質な胎土で焼成されている。94は口唇部が先端り、口縁屈曲部内側をつまみ出す際の指跡が認められる。95は口縁部から胴部にかけて丁寧なヨコナデが施され、口縁屈曲部内側のつまみ出しが明瞭である。96は口縁部下に1条の突帯が施され、胴部にはタテハケメによる調整がなされる。突帯は粗雑に貼り付けられている。表面には煤痕が認められる。97は口縁屈曲部内側の内面をつまみ出す際の指跡が認められる。98は口縁部上面が丸みを帯びる。鉱物の混入が少ない良質な胎土で焼成されているため、明赤色に近い発色を見せる。99は口縁部上面に凹みが見られるため、98とは口縁部の形状が異なり、別個体と思われるが、用いられた胎土や器の規格はおそらく同じであろう。98と99は双子の器であると思われる。100は口縁部下に1条の突帯を施す。101～104は口縁部の断面がおおよそ「錐先」形で、口唇部が垂れ下がり、口縁屈曲部の内側につまみ出しがなされる。101は口唇部全体が丸みを帯びる。鉱物の混入が少ない良質な胎土で焼成される。102は口縁部下に1条の突帯をめぐらせ、口唇部先端が凹面を施す。表面には丹塗りを施している。103は口縁部下に1条の沈線がめぐるように見えるが、全体的に摩滅が著しいため判然としない。口縁屈曲部内側のつまみ出しあまり明瞭でない。104は口縁部下に1条の突帯を施す。全体的に摩滅が著しく、調整などは観察できないが、表面にはわずかに丹塗りの痕跡が残る。105～108は口縁部の断面が「く」の字形とな

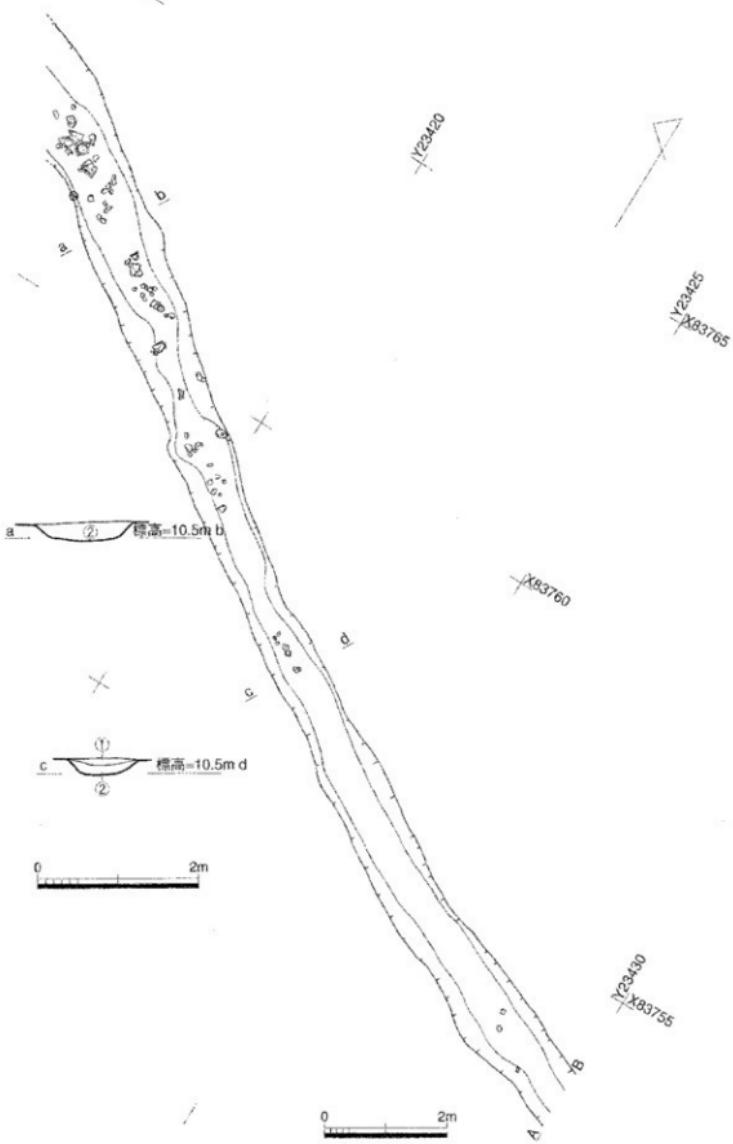


Fig. 16 池田大原地区 1号塗造構図 (1/80) および土層断面図 (1/60) ①

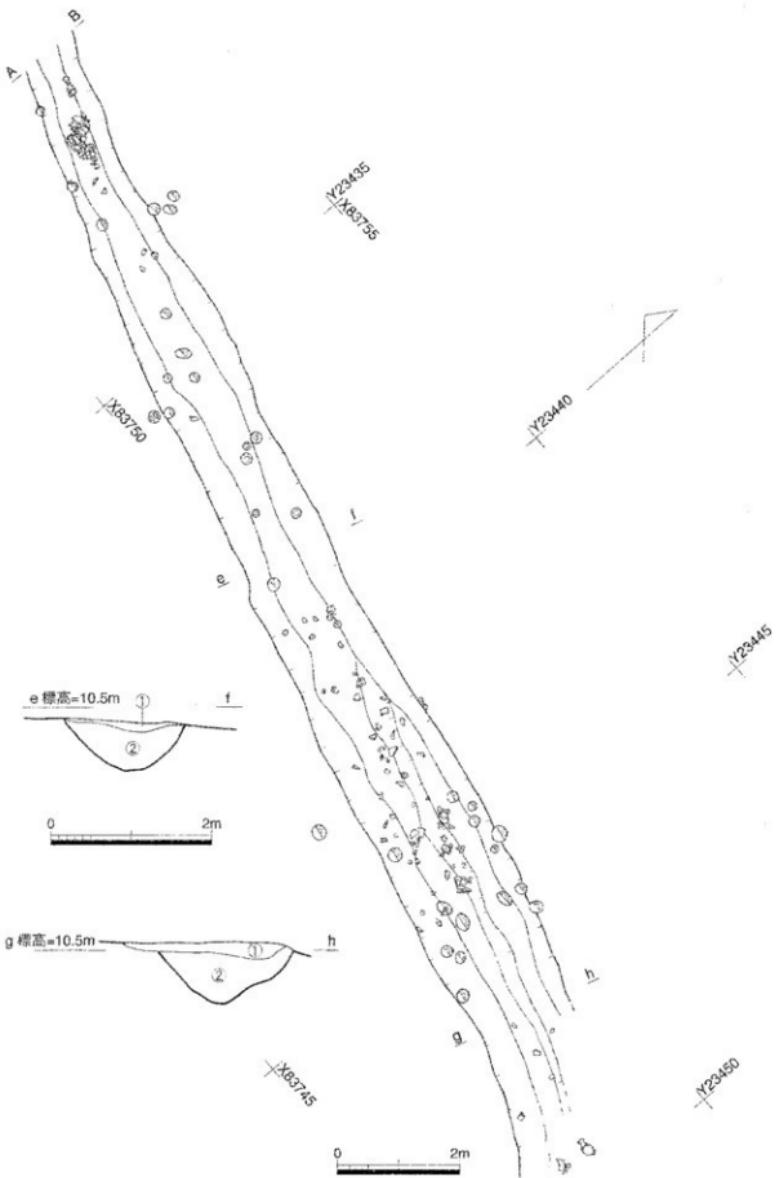


Fig. 17 池田大原地区 1号発達構図 (1/80) よりび土層断面図 (1/60) ②

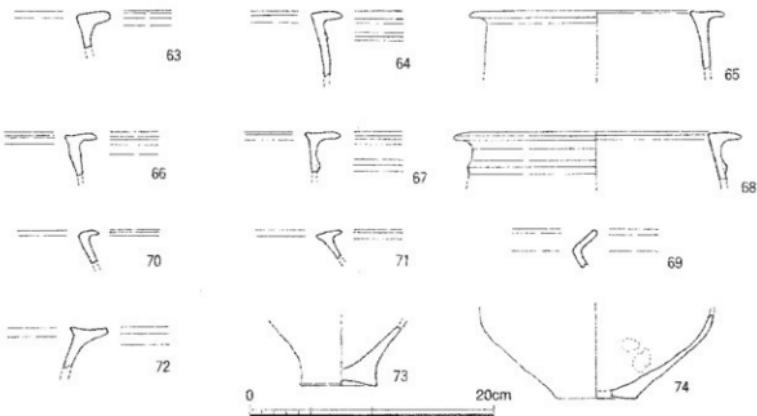


Fig. 18 池田大原地区 1号塚上層出土遺物図 (1/4)

る。105は口唇部が外湾するように広がり、口唇部先端が丸みを帯びる。口縁屈曲部内側の稜線はまだ明瞭でない。106は口唇部が口縁屈曲部から真っ直ぐに立ち上がり、口唇部先端が面取りされる傾向が見られる。107は口唇部が口縁屈曲部からやや内湾するように立ち上がり、口唇部先端の面取りも明瞭となる。108は口唇部が口縁屈曲部からやや内湾するように立ち上がり、口唇部先端上面をつまみ上げるように成形している。胴部の器壁が薄くなる傾向にある。全体的に摩滅しているが、表面に煤痕が付着している。109~115は壺の底部である。109は底が凹み、底の握部がやや広がる。微粒の鉱物を密に含み、良好な焼成である。110~115は平底である。110は底部断面が「M」字形となり、やや厚めの底である。114は裏面に煤痕が認められる。115は全体的に摩滅が著しいものの表面に丹塗りの痕跡が認められる。116~121は壺である。116~117は袋状口縁壺である。116は口縁部下、および頭部から胴部にかけて3条の「M」字突帯がめぐらされ、突帯の間にヘラミガキによる暗文が施される。表面には丹塗りの痕跡が認められ、鉱物の混入が少ない良質の胎土を用いて焼成されている。117は116と比べて袋状の口縁部がやや広がり、頭部のしまりも緩やかで全体的にすんぐりとした印象を受ける。表面には丹塗りの痕跡が認められる。118は短頸壺である。口縁部の断面が「錐先」形で、口唇部がやや垂れる。表面には丹塗りの痕跡が認められる。119~121は広口壺である。119は口縁部の断面が「錐先」形で口唇部が水平に伸び、口唇部先端は丸みを帯びる。口縁部内側のつまみ出しが明瞭である。120は口縁部の断面が「錐先」形で、口唇部が先端ながら伸びる。口縁部内側のつまみ出しが明瞭である。121は口縁部の断面が「錐先」形で、口縁部上面が凹面状となりつつ口唇部が伸びる。口縁部内側のつまみ出しが明瞭である。金雲母が多く混入する。122~124は鉢である。122は素口縁の鉢で、裏面に丹塗りの痕跡が認められる。表面の摩滅はそれほどでもないため、意図的に内面だけ丹塗りを施したと思われる。123は口縁部の断面が「錐先」形となる。口唇部は先端ながら伸び、口縁部内側のつまみ出しが少ない。表面および裏面とも丹塗りの痕跡が認められるが、表面

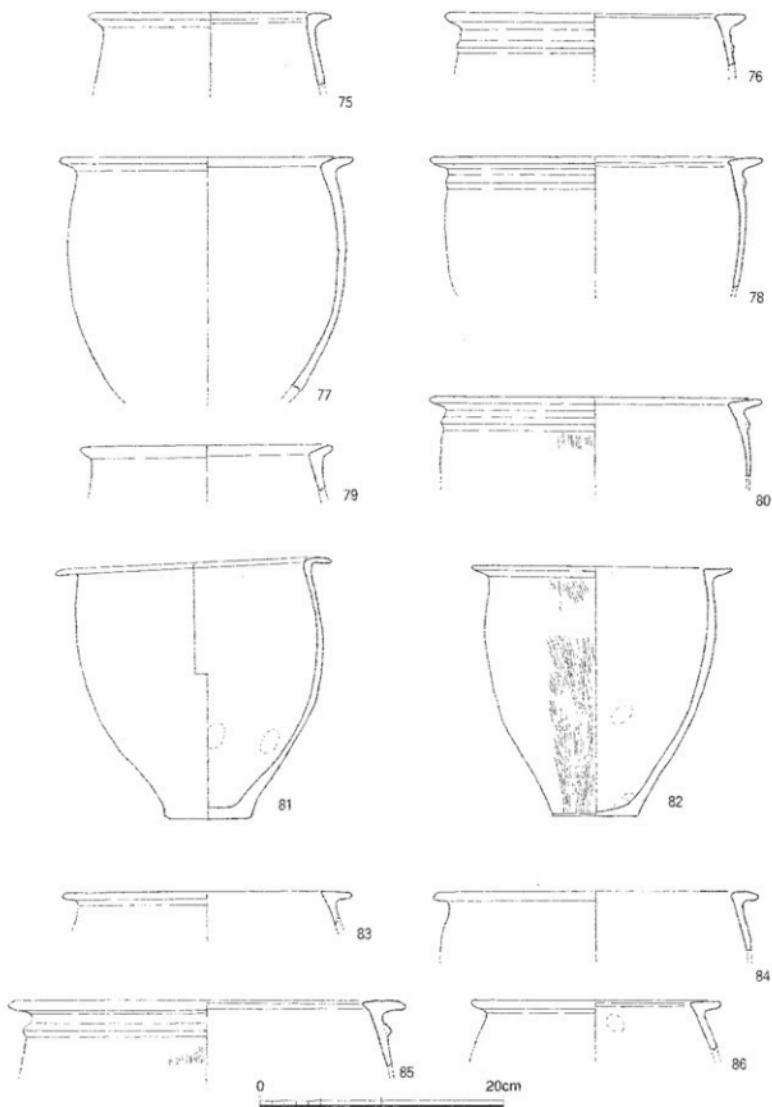


Fig. 19 池田大原地区 1号塚下層出土遺物図 (1/4) ①

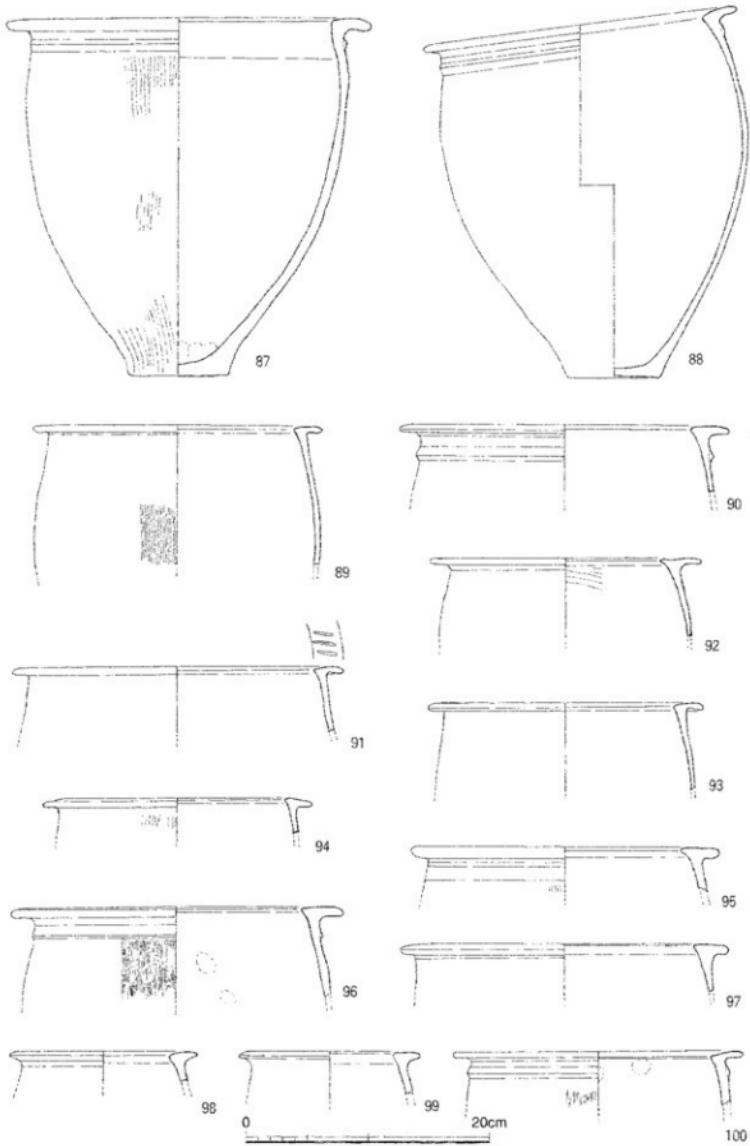


Fig. 20 池田大原地区 1号塗下層出土遺物図 (1/4) ②

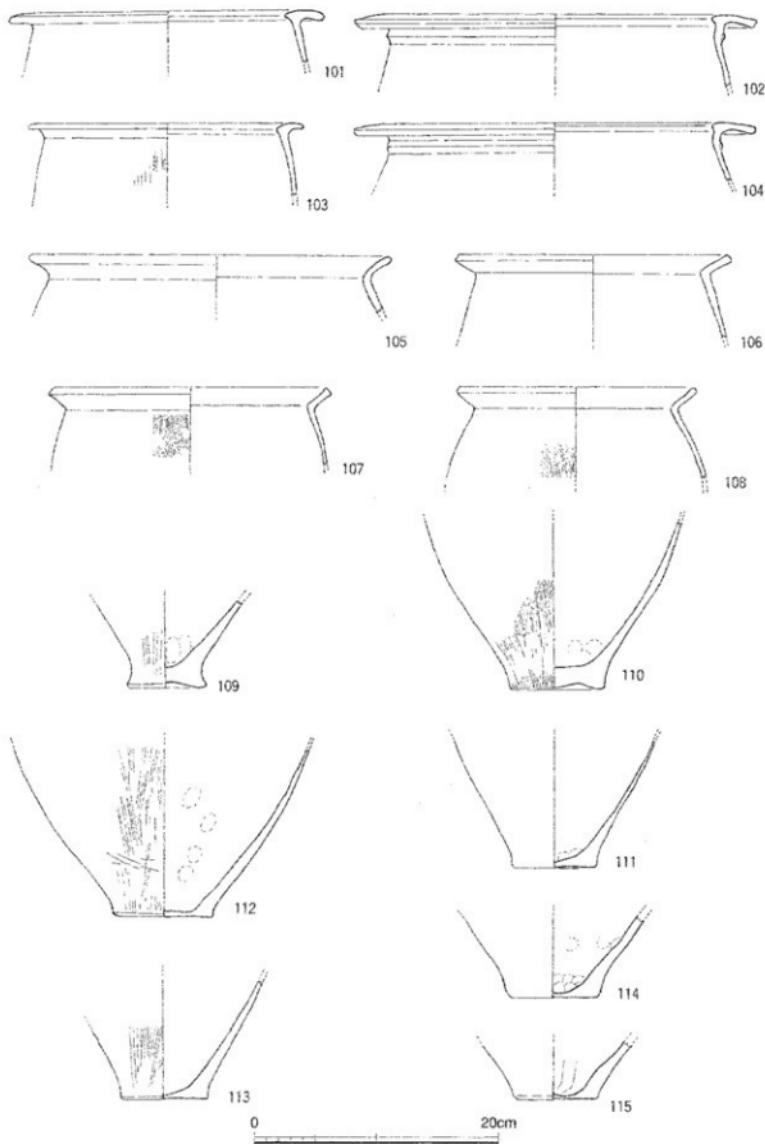


Fig. 21 池田大原地区 1号濠下層出土遺物図 (1/4) ③

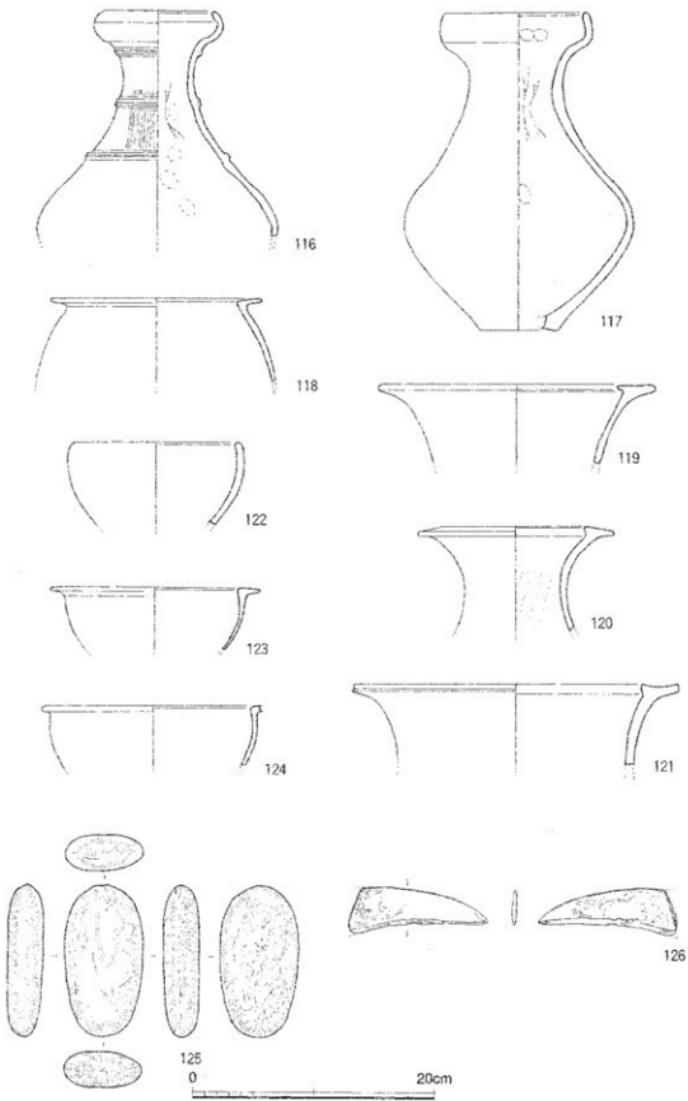


Fig. 22 池田大原地区 1号窯下層出土遺物図 (1/4) ④

の摩滅が著しい。124は口縁部が欠損しているが、おそらくは「鍔先」形になるものと思われる。122同様に内面にのみ丹塗りの痕跡が認められる。125は蔽石である。ちょうど手の平に収まる大きさで、長軸の両面に蔽痕が認められる。126は石鎌である。刃部は内湾し、両面とも銳利に研ぎ出されている。刃部の背面と基部の側面（石鎌の根本）は鈍角に交わる。75～76は弥生時代中期Ⅰ期（城之越段階）、77～80は中期Ⅱ期（須玖Ⅰ式古段階）、81～86は中期Ⅲ期（須玖Ⅰ式新段階）、87～100は中期Ⅳ期（須玖Ⅱ式古段階）、101～104は中期Ⅴ期（須玖Ⅱ式新段階）に相当すると思われる。

②2号濠

おおよそ東西軸に長さ10m、幅約1mを測る。調査区北側の傾斜で検出しており、傾斜の等高線に沿うように湾曲する。断面はU字を呈する。造構充填土は1層（2号濠①層）からなる。色調は褐色（10YR4/4）で1号濠の下層に近似するが、風化砂などの混入物があり均質ではない。遺物は1点のみ出土した。

次に2号濠の出土遺物を説明する。127は壺の底部で、平底である。

③不明造構

東西軸に約6m、南北軸に約4mを測る。調査区北側の傾斜地、2号濠の南側で検出した。おおよそ橿円形に平面の形状を呈する。検出当初は住居跡である可能性を考慮して調査を行ったが、柱穴跡が明確ないことや、床面に踏み締められた跡がないことなどから、不明造構として報告した。造構充填土は1層（不明造構①層）からなる。色調は黒褐色（10YR2/2）で1号濠の下層に近似する。

次に不明造構の出土遺物を説明する。128～146は壺の口縁部である。128～130は口縁部の断面が「三角」形となる。131～133は口縁部の断面が「コ」の字形となり、口唇部が水平に伸びる。134～145は口縁部の断面が「鍔先」形となり、口縁屈曲部内側のつまみ出しも明瞭となる。134～139および143は口縁部下に1条の突筋を施す。146は口縁部の断面が「く」の字となり、外湾しつつ立ち上がる。器壁も薄い。147～148は壺である。147は長頸で素口縁の頸部である。148は丸底の長頸壺である。147と148は古墳Ⅲ期に相当すると思われる。149～150は壺の底部で、ともに平底となる。151は壺の底部で、平底である。

④ピット群

調査区東側の傾斜で検出する傾向がある。そのため、ピット群の検出されない調査区西側の地域は、水田造成などで造構検出面が削平されている可能性が高い。ピット群の充填土には2種類ある。1つは黒褐色の土で、残るは褐色の土である。これらは1号濠に充填する上層と下層に施めて色調が近い。そのためピット群を充填土色調で分類し、その位置関係から造構の性格を検討したが、建物や櫛、または杭列などの造構を想定することはできなかった。

また遺物は敷基のピットから出土したが、摩滅を激しく受けた破片ばかりで、造構の性格を検討する材料とはならなかった。

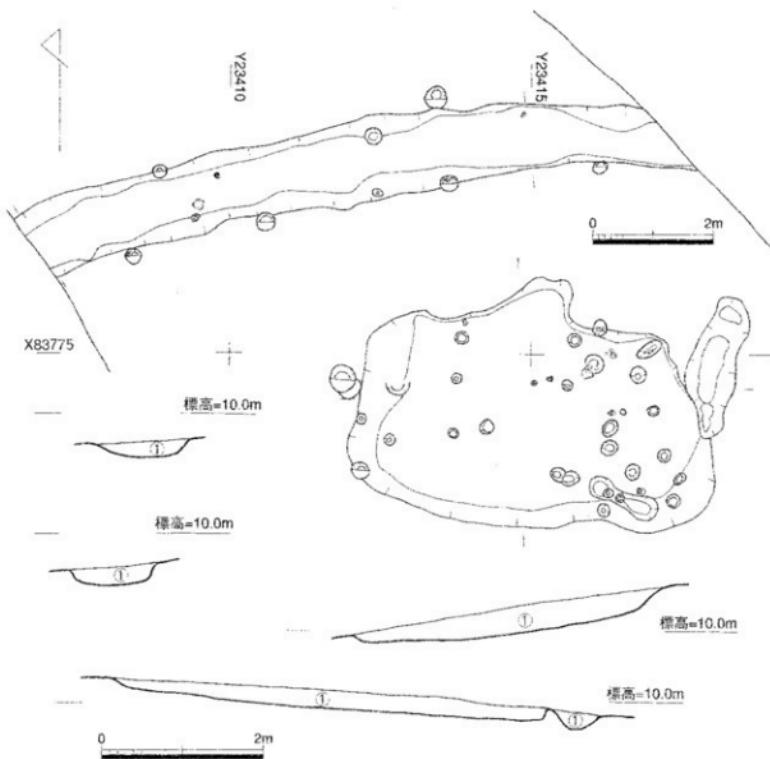


Fig. 23 池田大原地区 2号濠・不明遺構図 (1/80) および土層断面図 (1/60)

(4) 総括

1号濠に堆積する充填土は2層と単純である。

特に下層（1号壕②層）は層位の下部から上部まではほぼ均質であり、水の浸食作用などによって漸次堆積したとは考えにくい。出土する遺物のほとんどが下層上面に位置し、かつ完形に近い状態で出土する遺物が多いことからも、この遺構が人為的に棄棄された結果、埋没したものと考えられる。また1号壕の堆積状況や出土遺物の状況から、1号濠が水を溝えた水濠ではなく、「空堀」であったことがうかがえる。遺構が南東側ほど深い現象は、遺構北西側が後世に削平されたことを物語ると思われる。

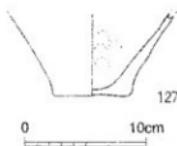


Fig. 24 池田大原地区 2号濠出土遺物図 (1/4)

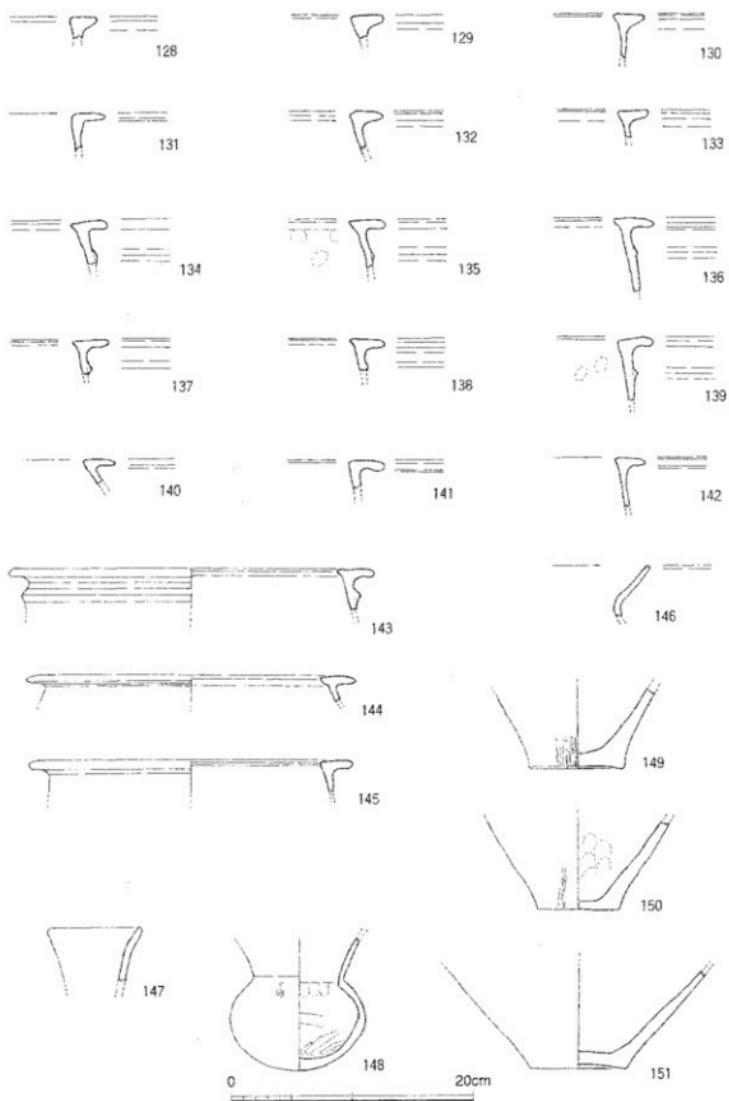


Fig. 25 池田大原地区不明遺構出土遺物図 (1 / 4)

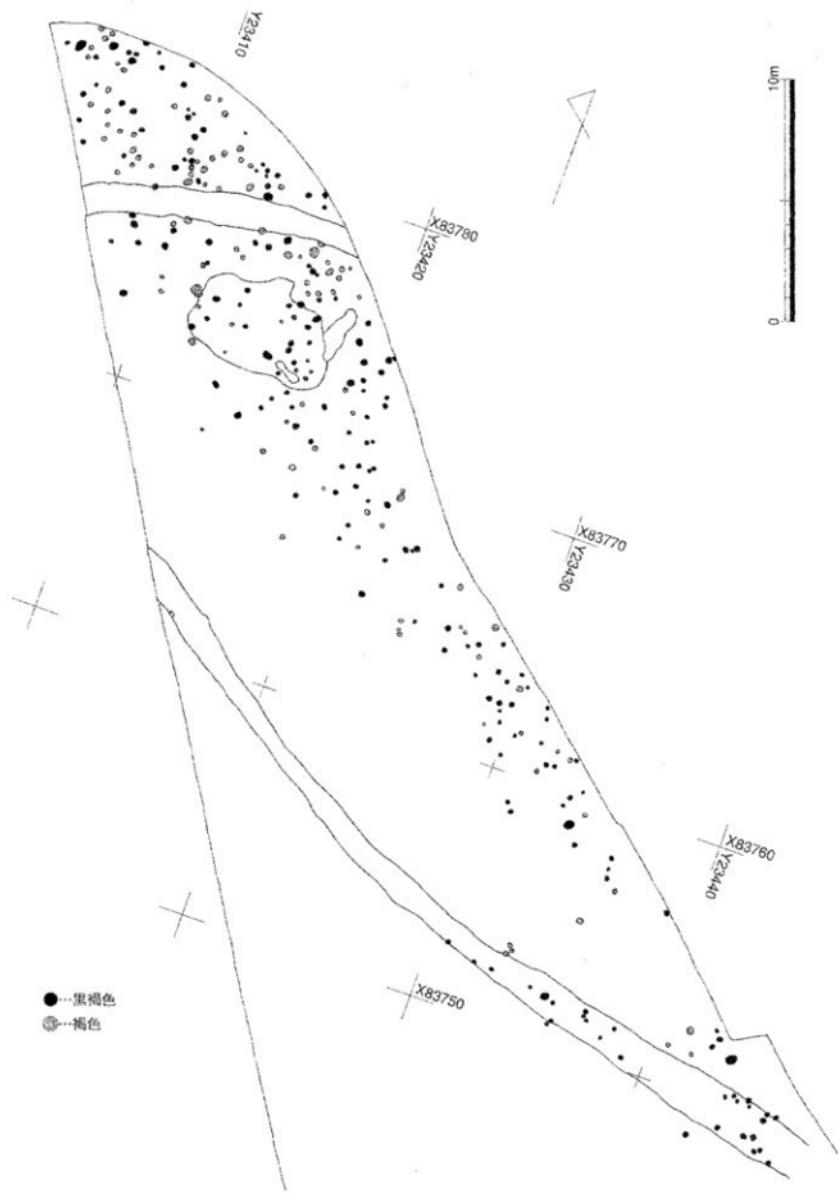


Fig. 26 池田大原地区ピット群図 (1/200)

次に下層（1号溝②層）から出土した遺物から検討する。上記の通り、下層から出土する遺物はその上面に位置するものが多い。また弥生時代中期が圧倒的に多く、残存状況も良好である。口縁部や底部の破片から器種の判断が可能な遺物は107点あり、器種比率は壺85点（79.4%）、盞19点（17.8%）、高环ほか3点（2.8%）であった。下層から出土した壺口縁部で時期判断を行い、その個数を集計したもののがTab. 4である。なお、時期判断は「原の辻遺跡縄集編Ⅰ」「V遺物」〔福田・中尾2005〕を参照した。

1号濠が掘削された時期は、下層から出土した壺口縁部の様相から中期Ⅱ期（須玖Ⅰ古段階）頃と推測される。掘削された後、濠の整備（浚渫）が頻繁に行われたと仮定すれば、下層に含まれる中期Ⅱ期までの壺口縁部が少ないという現象の背景となりうる。その後、中期Ⅳ期（須玖Ⅱ古段階）～中期Ⅴ期（須玖Ⅱ新段階）の壺口縁部が急激に増える要因に、1号溝の埋没を想定することができる。なお、後期と判断されるものが9点確認されるが、これは上層からの混入である可能性が高い。

さらに上層（1号濠①層）から出土した遺物から検討を続ける。上層から出土した壺口縁部も下層と同様に時期判断を行った。Tab. 4はその集計である。上層から出土する壺口縁部に弥生時代後期の資料が存在しない現象からは、上層が1号濠を再掘した後の堆積であるとは考えにくい。しかしながら、上層がかなりの範囲かつ深度にわたって後世の削平を受けていることは容易に想像される。今回出土した遺物が、上層の堆積過程を明確に示しているとは言い切れない。

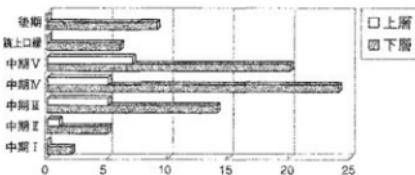
原の辻遺跡では、弥生時代前葉に環濠の掘削が行われ、中期後葉から中期終末にいたるは埋没する。その後、再び環濠の掘削が弥生時代後期前葉頃に行われ、後期後葉から終末にかけて再び埋没する傾向にあるとされる〔宮崎2001〕。1号濠の掘削および埋没も同様の変遷をたどったと仮定すれば、上層は弥生時代後期前葉頃に再掘削された後に弥生時代後期後葉～終末頃に再埋没していく過程での堆積と推測ができる。

なお、1号濠下層出土の壺（Fig. 20: 88）に充填していた土壌を洗浄して得られた炭化物を加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定にかけたところ、 2030 ± 40 年BP（ 2σ の曆年代でBC160～AD60）の年代値が得られた。この壺は型式的に中期Ⅳ期（須玖Ⅱ式古段階）の特徴をもつ。

【参考文献】

宮崎貴大（2001）「原の辻遺跡における歴史的契機について」『西海考古』第4号（西海考古同人会）

壺口縁部類型	下層	上層	備考
中期Ⅰ	2	0	城之内段階
中期Ⅱ	5	1	須玖Ⅰ式古段階
中期Ⅲ	14	5	須玖Ⅰ式新段階
中期Ⅳ	24	51	須玖Ⅱ式古段階
中期Ⅴ	20	7	須玖Ⅱ式新段階
壺上口縁	6	0	中期Ⅳ～V間に相当
後期	1	9	0



Tab. 4 池田大原地区1号濠出土壺形土器口縁部時期別集計表

3. 原ノ久保地区

(1) 調査概要

原ノ久保地区は県道工事でコンクリート溶壁を取り外した際に確認された塗の土層断面を記録したものである。H17県道調査〔2006林〕を実施した所であるが、当時はコンクリート壁が撤去されていなかったため、調査区内で確認することができなかった。

(2) 基本層序

1層から2層は明褐色の耕作土である。3層は弥生遺物包含層で粘質が強く、色調は暗褐色である。4層も弥生遺物包含層であるが、3層に比べやや明るい暗褐色の色調である。5層は遺構の掘り込み面となり、色調は明褐色である。6層は明黄色の基盤層である。

(3) 遺構

土層で確認された塗は断面V字を呈し、やや北側の傾斜が緩やかで左右非対称となる。遺構の充填土は10層からなる。
①層は黒褐色粘質土層、
②層は暗褐色粘質土層、
③層は黒褐色粘質土層で炭化物をわずかに含む。
④層は暗褐色粘質土層で、③層同様に炭化物をわずかに含む。
⑤層は黒褐色度で、炭化物が③層～④層に比べ多く含まれる。
⑥層は褐灰色粘質土層である。
⑦層は暗褐色土層である。
⑧層は⑦層よりもやや暗い暗褐色で、粘質は弱くなる。
⑨層は黒色土で、炭化物が見られる。
⑩層は明褐色土層である。

(4) 総括

この遺構はH16県道調査〔2006林〕で確認した溝状遺構につながるものと思われる。H17県道調査でこの溝状遺構の続きを確認できなかったことから、この塗が北へ向きを変えたと報告した。しかしながら、今回の確認で、この塗がH17県道調査を実施した丘陵を越えて西側へ延びる可能性が高まった。

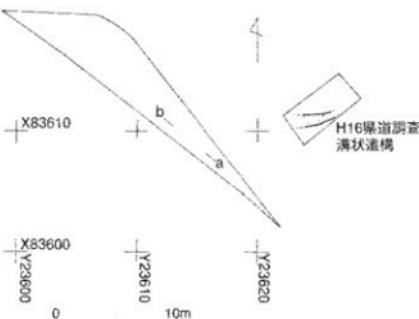


Fig. 27 原ノ久保地区全体図 (1/400)

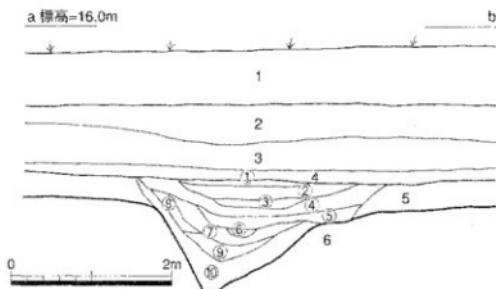


Fig. 28 原ノ久保地区塗土層断面図 (1/60)

報告番号	調査地区	遺物	層位	色調番号(外)	色調番号(内)	断面	断面	断面
透空手法								
1		S D 3	-	10YR8/4透黄褐	5YR7/4にひい橙	石英・長石 透空(1条)	斐	口縁・網部
	表:口縁=ヨコナデ 脚部=タマハシメ 裏:ナデ	S D 3	-	7.5YR7.2明褐色	10YR7/1灰白	石英・長石 透空(1条)	斐	口縁・網部
2	表:ヨコナデ 内:ヨコナデ	S D 3	-	金属性の透感で透り、詳細は不明	5YR6/3にひい橙	7.5YR5/2灰褐色	斐	口縁・網部
3	表:ヨコナデ 気:ヨコナデ	S D 3	-	10YR7.2にひい橙	7.5YR7/4にひい橙	1条空透	斐	口縁・網部
4	表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ 脚部=タマハシメ	S D 3	-	10YR7.2にひい橙	7.5YR7/4にひい橙	石英・長石	斐	口縁・網部
5	表:ヨコナデ 内:ヨコナデ	S D 3	-	10YR8/3透黄褐	10YR4/1褐灰	石英・長石	斐	底部
6	全体的に透感が強く、詳細は不明	S D 3	-	5YR7.6透	10YR5/1褐灰	石英・長石	斐	口縁部
7	全体的に透感が強く、詳細は不明	S D 5	-	10YR6/3にひい橙	2.5YR7.2灰黄	石英・長石 透空(1条)	斐	口縁部
8	表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	S D 5	-	7.5YR7/4にひい橙	7.5YR7.2明褐色	石英・長石	斐	口縁部
9	表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	S D 5	-	7.5YR6/4にひい橙	7.5YR5/2灰褐色	石英・長石 透空	斐	口縁部
10	表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	S D 5	-	2.5YR5.8明赤褐	2.5YR6/8透	赤土透空	斐	口縁部
11	全体的に透感が強く、詳細は不明	S D 5	-	2.5YR6/4にひい橙	5YR5/2灰褐色	石英・長石	斐	底部
12	全体的に透感が強く、詳細は不明	S D 5	-	10R6/3にひい橙	7.5R7/1明赤褐	石英・長石 透空(1条)	斐	口縁部
13	粘土質にヨコナデ	S D 1	-	10YR7/4にひい黄褐	5YR7/4にひい橙	透空(1条)	斐	口縁部
14	透空:ヨコナデ	S D 1	-	7.5YR7.6透	10YR7/2にひい黄褐	石英・長石 透空(1条)	斐	口縁部
15	透空:ヨコナデ	S D 1	-	5YR5/6明赤褐	2.5YR7/2灰黄	石英・長石 透空(1条)	斐	口縁部
16	全体的に透感が強く、詳細は不明	S D 1	-	10YR7/4にひい黄褐	7.5YR7.4にひい橙	石英・長石 透空(1条)	斐	口縁部
17	全体的に透感が強く、詳細は不明	S D 2	-	7.5YR6/4にひい橙	10YR7/2にひい黄褐	石英・長石 透空(1条)	斐	口縁部
18	表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	S D 2	-	2.5YR7.4浅赤棕	5YR6/6透	石英・長石 透空(1条)	斐	口縁部
19	表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	S D 2	-	7.5YR7/6透	7.5YR5/4にひい透	石英・長石 透空(1条)	斐	口縁・網部
20	表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	S D 2	-	7.5YR6/4にひい透	10YR7/1褐灰	石英・長石 透空(1条)	斐	口縁・網部
21	表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	S D 2	-	7.5YR5/6明赤褐	10YR7/2にひい黄赤	石英・長石 透空(1条)	斐	口縁・網部
22	表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	S D 2	-	10YR6/3にひい黄褐	10R5/8透	石英・長石 透空(1条)	斐	口縁・網部
23	透感が強く、詳細は不明	S D 2	-	10YR7/3にひい黄褐	7.5YR6/4にひい透	石英・長石 透空(1条)	斐	口縁・網部
24	透感が強く、詳細は不明	S D 2	-	10YR7/3にひい黄褐	5YR4/6赤褐	石英・長石 透空(1条)	斐	口縁・網部
25	透感が強く、詳細は不明	S D 2	-	5YR5/6明赤褐	10YR7/3にひい黄褐	石英・長石 透空(1条)	斐	口縁部
26	透感が強く、詳細は不明	S D 2	-	7.5YR6/3にひい橙	2.5YR8/2灰白	石英・長石	斐	口縁部
27	透感が強く、詳細は不明	S D 2	-	5YR6/6透	7.5YR6/6透	石英・長石 透空	斐	口縁部
28	透感が強く、詳細は不明	S D 2	-	7.5YR7/3にひい透	7.5YR7/3にひい透	透空(1条)	斐	口縁部
29	透感が強く、詳細は不明	S D 2	-	10R5/6赤棕	5YR6/6透	石英・長石	斐	底部
30	透感が強く、詳細は不明	S D 2	-	5YR6/6透	7.5YR7/4にひい透	石英・長石 透空(1条)	斐	底部
31	透感が強く、詳細は不明	S D 2	-	7.5YR7/4にひい透	7.5YR7/1褐灰	石英・長石 透空	斐	口縁部
32	透感が強く、詳細は不明	S D 4	-	10R5/4赤褐	2.5YR5.6明赤褐	石英・長石	斐	口縁部
33	透感が強く、詳細は不明	S D 4	-	7.5YR4/2灰褐色	2.5YR5/4にひい透	石英・長石	斐	口縁部
34	透感が強く、詳細は不明	S D 4	-	10R6/6赤棕	5YR7/6透	石英・長石	斐	口縁部
35	透感が強く、詳細は不明	S D 4	-	5YR5/3にひい赤褐	10R6/4にひい赤褐	石英・長石・透空	斐	口縁部
36	透感が強く、詳細は不明	S X 1	-	2.5YR5.6明赤褐	10YR6/2灰黄褐	石英・長石・透空	斐	口縁・網部
37	透感が強く、詳細は不明	S X 1	-	2.5YR7/4淡赤棕	2.5YR7.8透	石英・長石	斐	口縁・網部
38	透感が強く、詳細は不明	S X 1	-	2.5YR7/4淡赤棕	2.5YR7.8透	石英・長石	斐	口縁・網部
39	透感が強く、詳細は不明	S X 1	-	2.5YR6/6透	10YR7/3にひい黄褐	石英・長石・無透空	斐	口縁部
40	透感が強く、詳細は不明	S X 1	-	2.5YR6/6透	10YR7/3にひい黄褐	石英・長石・無透空	斐	底部

Tab. 5 土器觀察表①

報告書号	調査地区	地勢	層位	色調番号(外)	色調番号(内)	鉄土 帶	器種	残存部位	
調査手法									
41	不整 表:ナデ 裏:ナデ	高	S X 1	-	10R6/8赤褐色	2.5YR7/6橙	石英・長石 斑晶(1条)	塊	底部
42	不整 表:ハケメ 裏:口縁-ハケメ	低	S X 2	-	7.5YR5/2灰褐色	10YR6/3にぶい黄褐色	石英・長石・金雲母 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部
43	不整 表:ハケメ 裏:口縁-ハケメ	低	S X 2	-	5YR7/6橙	7.5YR7/3にぶい橙	石英・長石 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部
44	不整 表:口縁-ナデ 裏:口縁-ナデ	低	S X 2	-	5YR7/4にぶい橙	10YR6/2灰黃褐色	石英・長石・黑雲母 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部
45	不整 表:黒成が差し、評価は不明 裏:ナデ	中	S X 2	-	5YR6/4にぶい橙	5YR7/4にぶい橙	石英・長石・金雲母 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部
46	不整 表:ナデ 裏:ナデ	中	S X 2	-	10YR7/4にぶい黄褐色	7.5YR7/3にぶい橙	石英・長石 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部
47	不整 表:ナデ 裏:ナデ	中	S X 2	-	7.5YR7/4にぶい橙	2.5YR6/8暗	石英・長石 斑晶(2条)	塊	口縫~崩部
48	不整 表:口縁=ユビコサエ 裏:ナデ	中	S X 2	-	7.5YR5/3にぶい橙	10YR5/2灰黃褐色	石英・長石・金雲母 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部
49	不整 表:ナデ 裏:ナデ	中	S X 2	-	7.5YR7/3にぶい橙	5YR6/6暗	石英・長石 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部
50	不整 表:ヨコナデ 裏:ハケメ	中	S X 2	-	10R6/6赤褐色	10R6/6灰褐色	石英・長石 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部
51	不整 表:口縁=ユビコサエ 裏:ナデ	中	S X 2	-	10YR5/3にぶい黄褐色	10YR8/2灰白	石英・長石・金雲母 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部
52	不整 表:ハケメ 裏:ナデ	中	S X 2	-	7.5YR3/2黒褐色	10YR3/2黒褐色	石英・長石・金雲母 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部
53	不整 表:ヨコナデ 裏:ナデ	中	S X 2	-	10YR2/1黒	10YR6/2灰黃褐色	石英・長石 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部
54	不整 表:ヨコナデ 裏:ハケメ	中	S X 2	-	7.5YR5/2灰褐色	7.5YR8/4浅黃褐色	石英・長石・金雲母 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部
55	不整 表:ハケメ	中	S X 2	-	7.5YR6/3にぶい黒褐色	7.5YR7/4にぶい橙	石英・長石 斑晶(2条)	塊	口縫~崩部
56	不整 表:口縁=ハケメ 裏:ナデ	中	S X 2	-	7.5YR5/2灰白色	7.5YR5/4浅黃褐色	石英・長石・金雲母 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部
57	不整 表:ヨコナデ 裏:ナデ	中	S X 2	-	10YR7/2にぶい橙	10YR6/2灰黃褐色	石英・長石 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部
58	不整 表:ハケメ 裏:ユビコサエ	中	S X 2	-	2.5Y3/1墨褐色	2.5YR8/2灰白	石英・長石 斑晶(1条)	塊	底部
59	不整 表:ハケメ 裏:ナデ	中	S X 2	-	7.5YR7/6暗	10YR7/2にぶい黃褐色	石英・長石・金雲母 斑晶(1条)	塊	底部
60	不整 表:ナデ	中	S X 2	-	7.5YR7/6暗	-	石英・長石 斑晶(1条)	塊	上部縫合部
61	不整 表:ナデ 裏:ビニコナデ	中	S X 2	-	5YR6/4にぶい橙	5YR5/1褐色	石英・長石 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部
62	不整 表:ナデ 裏:ナデ	中	S X 2	-	7.5YR5/3にぶい橙	7.5YR5/2灰褐色	石英・長石 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部
63	平坦未開 表:ナデ 裏:ヨコナデ	中	1号溝 上層	7.5YR6/6暗	7.5YR6/6暗	石英・長石 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部	
64	圃田大原 表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	中	1号溝 上層	2.5YR6/8暗	2.5YR5/6明赤褐色	石英・長石 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部	
65	圃田大原 表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	中	1号溝 上層	2.5YR6/8暗	2.5YR5/6明赤褐色	石英・長石 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部	
66	圃田大原 表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	中	1号溝 上層	5YR6/4にぶい橙	5YR6/4にぶい橙	石英・長石 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部	
67	圃田大原 表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	中	1号溝 上層	5YR6/6暗	5YR6/8暗	石英・長石 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部	
68	圃田大原 表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	中	1号溝 上層	5YR6/6暗	5YR6/4にぶい橙	石英・長石 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部	
69	圃田大原 表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	中	1号溝 上層	10YR7/4にぶい黄褐色	10YR7/4にぶい黄褐色	石英・長石 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部	
70	圃田大原 表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	中	1号溝 上層	5YR7/8暗	5YR7/8暗	石英・長石 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部	
71	圃田大原 表:ナデ 裏:ナデ	中	1号溝 上層	2.5YR6/6暗	5YR6/6暗	石英・長石 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部	
72	圃田大原 表:ナデ 裏:ナデ	中	1号溝 上層	5YR6/6暗	5YR6/6暗	石英・長石 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部	
73	圃田大原 表:茶成が差し、評価は不明 裏:ヨコナデ	中	1号溝 上層	5YR5/54赤褐色	5YR5/4にぶい赤褐色	石英・長石 斑晶(1条)	塊	底部	
74	圃田大原 表:茶成が差し、評価は不明	中	1号溝 上層	5YR5/6灰褐色	5YR5/4にぶい赤褐色	石英・長石 斑晶(1条)	塊	底部	
75	圃田大原 表:ヨコナデ・ナデ 裏:ヨコナデ・ナデ	中	1号溝 下層	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/6暗	石英・長石 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部	
76	圃田大原 表:ナデ 裏:ナデ	中	1号溝 下層	5YR5/6明赤褐色	5YR5/6明赤褐色	石英・長石 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部	
77	圃田大原 表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	中	1号溝 下層	7.5YR6/3にぶい黒褐色	7.5YR7/4にぶい橙	石英・長石 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部	
78	圃田大原 表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	中	1号溝 下層	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	石英・長石 斑晶(1条)	塊	口縫~崩部	

Tab. 6 土器観察表②

報告番号	調査地区	遺構	局位	色調番号(外)	色調番号(内)	胎土	器種	残存部位
79	泡田大原 表:ヨコナデ 裏:ナダ	1号塗	下層	7.5YR7.4/にい・赤	2.5YR5.6/明赤褐色	石英・長石 丹青(裏面)	甕	白緑部
80	泡田大原 表:ヨコナデ 裏:ナダ	1号塗	下層	5YR6.6/橙	5YR6.6/橙	石英・長石 丹青(裏面) 金剛石(1条)	甕	口縁・肩部
81	泡田大原 表:ヨコナデ 裏:ナダ	1号塗	下層	3YR5.8/明赤褐色	2.5YR5.6/明赤褐色	石英・長石	甕	完形
82	泡田大原 表:ヨコナデ 裏:ナダ	1号塗	下層	10YR7.3/にい・黃室	10YR7.3/にい・武登	石英・長石	甕	口縁・完形
83	泡田大原 表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	1号塗	下層	7.5YR6.4/にい・橙	7.5YR6.6/橙	石英・長石	甕	白緑部
84	泡田大原 表:ナダ 裏:ナダ	1号塗	下層	7.5YR6.6/橙	10YR4.3/にい・黃橙	石英・長石	甕	白緑部
85	泡田大原 表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	1号塗	下層	5YR6.6/橙	5YR7.6/橙	石英・長石 空窓(1条)	甕	白緑部
86	泡田大原 表:ヨコナデ 裏:ナダ	1号塗	下層	5YR6.4/にい・橙	5YR6.6/橙	石英・長石	甕	白緑部
87	泡田大原 表:江綱一空窓-ヨコナデ 裏:江綱一空窓	1号塗	下層	7.5YR6.6/橙	5YR6.6/橙	石英・長石 空窓(1条)	甕	完形
88	泡田大原 表:江綱一空窓 裏:江綱一空窓	1号塗	下層	2.5YR6.6/橙	7.5YR6.4/にい・橙	石英・長石 空窓(1条)	甕	完形
89	泡田大原 表:江綱一空窓上半ヨコナデ 裏:江綱一空窓	1号塗	下層	5YR6.6/橙	5YR6.6/橙	石英・長石	甕	口縁・肩部
90	泡田大原 表:江綱一空窓 裏:江綱一空窓	1号塗	下層	5YR6.8/橙	5YR6.6/橙	石英・長石 空窓(1条)	甕	白緑部
91	泡田大原 表:江綱一ヨコナデ 裏:江綱一ヨコナデ	1号塗	下層	5YR6.6/橙	5YR6.8/橙	石英・長石 腰鉢(口縁等上面に3条)	甕	白緑部
92	泡田大原 表:江綱一ヨコナデ 裏:江綱一ヨコナデ	1号塗	下層	2.5YR5.8/明赤褐色	2.5YR5.6/明赤褐色	石英・長石	甕	白緑部
93	泡田大原 表:江綱一ヨコナデ 裏:江綱一ヨコナデ	1号塗	下層	5YR6.8/橙	5YR6.6/橙	石英・長石	甕	口縁・肩部
94	泡田大原 表:江綱一ヨコナデ 裏:江綱一ヨコナデ	1号塗	下層	5YR4.8/にい・赤褐色	5YR4.6/赤褐色	石英・長石	甕	白緑部
95	泡田大原 表:江綱一ヨコナデ 裏:江綱一ヨコナデ	1号塗	下層	5YR5.6/明赤褐色	5YR6.6/明赤褐色	石英・長石・金雲母	甕	白緑部
96	泡田大原 表:江綱一ヨコナデ 裏:江綱一ヨコナデ	1号塗	下層	2.5YR5.6/明赤褐色	2.5YR6.6/橙	石英・長石 空窓(1条)・模造(表面)	甕	口縁・肩部
97	泡田大原 表:江綱一ヨコナデ 裏:江綱一ヨコナデ	1号塗	下層	2.5YR5.6/明赤褐色	5YR5.6/明赤褐色	石英・長石	甕	口縁部
98	泡田大原 表:江綱一ヨコナデ 裏:江綱一ヨコナデ	1号塗	下層	2.5YR6.8/橙	2.5YR6.8/橙	石英・長石	甕	口縁部
99	泡田大原 表:江綱一ヨコナデ 裏:江綱一ヨコナデ	1号塗	下層	2.5YR5.6/明赤褐色	2.5YR5.6/明赤褐色	石英・長石	甕	口縁部
100	泡田大原 表:江綱一空窓-ヨコナデ 裏:江綱一空窓	1号塗	下層	5YR6.6/橙	5YR6.6/橙	石英・長石 空窓(1条)	甕	口縁部
101	泡田大原 表:江綱一ヨコナデ 裏:江綱一ヨコナデ	1号塗	下層	5YR5.6/明赤褐色	5YR5.6/明赤褐色	石英・長石	甕	口縁部
102	泡田大原 表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	1号塗	下層	2.5YR4.8/赤褐色	2.5YR6.6/橙	石英・長石 空窓(1条)・丹波(裏面)	甕	白緑部
103	泡田大原 表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	1号塗	下層	5YR6.6/橙	5YR5.4/にい・赤褐色	石英・長石 空窓(1条)	甕	口縁部
104	泡田大原 表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	1号塗	下層	5YR6.6/橙	5YR6/6橙	石英・長石 空窓(1条)・丹波(裏面)	甕	白緑部
105	泡田大原 表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	1号塗	下層	7.5YR7.3/にい・橙	7.5YR7.3/にい・橙	石英・長石	甕	口縁部
106	泡田大原 表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	1号塗	下層	10YR7.3/にい・黄橙	10YR7.3/にい・黄橙	石英・長石	甕	口縁部
107	泡田大原 表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	1号塗	下層	5YR6.6/橙	7.5YR5.4/にい・赤褐色	石英・長石	甕	口縁部
108	泡田大原 表:江綱一ヨコナデ 裏:江綱一ヨコナデ	1号塗	下層	7.5YR6.8/にい・橙	10YR7.4/にい・黄橙	石英・長石 模造(表面)	甕	口縁部
109	泡田大原 表:タテハケメ	1号塗	下層	7.5YR6.6/橙	7.5YR6.6/橙	石英・長石	甕	底部
110	泡田大原 表:タテハケメ 裏:ナダ	1号塗	下層	5YR6.6/橙	5YR5.6/明赤褐色	石英・長石	甕	底部
111	泡田大原 表:タテハケメ 裏:ナダ	1号塗	下層	5YR6.6/橙	5YR2.1/墨	石英・長石	甕	底部
112	泡田大原 表:タテハケメ 裏:ナダ	1号塗	下層	5YR6.6/橙	5YR6/6橙	石英・長石	甕	底部
113	泡田大原 表:タテハケメ 裏:ナダ	1号塗	下層	10YR7.4/にい・黄橙	10YR6.4/にい・黄橙	石英・長石	甕	底部
114	泡田大原 表:タテハケメ 裏:ナダ	1号塗	下層	7.5YR6.6/にい・橙	7.5YR3.2/黒褐色	石英・長石 模造(裏面)	甕	底部
115	泡田大原 表:タテハケメ 裏:ナダ	1号塗	下層	2.5YR4.8/赤褐色	7.5YR6.6/橙	石英・長石 模造(裏面)	甕	底部
116	泡田大原 表:ヨコナデ 裏:ヨコナデ	1号塗	下層	2.5YR6.8/橙	2.5YR6.6/橙	石英・長石 M字彫(3条)・輪文・片掛(裏面)・委状口縁	甕	口縁・肩部

Tab. 7 土器観察表③

報告番号	調査地区	遺構	層位	色調番号(外)	色調番号(内)	胎土 鉱物	器種	残存部位
117	瀬田大原 表:ナデ	1号塗 下層	7.5YR7/4にぶい緑	7.5YR6/4にぶい緑	石英、長石 方解石(表層)	壺 袋状口付壺	口縁~肩部	
118	瀬田大原 表:コナデ	1号塗 下層	2.5YR5/4にぶい赤褐	5YR6/4にぶい緑	石英、長石 方解石(表層)	壺 袋状口付壺	口縁~肩部	
119	瀬田大原 表:コナデ	1号塗 下層	7.5YR6/6橙	10YR6/3にぶい黄緑	石英、長石 方解石	壺	口縁~頸部	
120	瀬田大原 表:コナデ	1号塗 下層	5YR6/8緑	5YR6/8緑	石英、長石 方解石	壺	口縁~頸部	
121	瀬田大原 表:コナデ	1号塗 下層	5YR6/6緑	5YR6/6緑	石英、長石、含鉄母 方解石	壺	口縁~頸部	
122	瀬田大原 表:ナデ	1号塗 下層	2.5YR6/8緑	10YR1/6赤	石英、長石 丹青(表面)	壺	口縁~腹部	
123	瀬田大原 表:コナデ	1号塗 下層	7.5YR5/4にぶい緑	2.5YR4/6赤褐	石英、長石 月桂(素盞媛)	壺	口縁~肩部	
124	瀬田大原 表:ナデ	1号塗 下層	2.5YR6/3にぶい緑	7.5YR6/6緑	石英、長石 丹青(表面)	壺	口縁~頸部	
127	瀬田大原 表:座滅(?)表層不明 表:ヨコナデ	2号塗	2.5YR5/6明赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	石英、長石	壺	底部	
128	瀬田大原 表:ヨコナデ	不明遺構	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	長石、石英	壺	口縁部	
129	瀬田大原 表:ヨコナデ	不明遺構	7.5YR7/4にぶい緑	5YR7/6緑	長石、石英	壺	口縁部	
130	瀬田大原 表:ヨコナデ	不明遺構	2.5YR6/8緑	5YR5/6緑	長石、石英	壺	口縁部	
131	瀬田大原 表:ヨコナデ	不明遺構	5YR6/8緑	5YR6/8緑	長石、石英	壺	口縁部	
132	瀬田大原 表:ヨコナデ	不明遺構	2.5YR4/6赤褐	2.5YR4/6赤褐	長石、石英	壺	口縁部	
133	瀬田六原 表:ヨコナデ	不明遺構	2.5YR6/6緑	5YR6/6緑	長石、石英	壺	口縁部	
134	瀬田六原 表:ヨコナデ	不明遺構	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR6/6緑	長石、石英	壺	口縁部	
135	瀬田六原 表:ヨコナデ	不明遺構	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/8明赤褐	長石、石英 安息香(?)	壺	口縁部	
136	瀬田六原 表:ヨコナデ	不明遺構	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	長石、石英 安息香(?)	壺	口縁部	
137	瀬田六原 表:ヨコナデ	不明遺構	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	長石、石英 安息香(?)	壺	口縁部	
138	瀬田六原 表:ヨコナデ	不明遺構	2.5YR6/6橙	5YR6/6緑	長石、石英 安息香(?)	壺	口縁部	
139	瀬田六原 表:ヨコナデ	不明遺構	10YR6/4浅赤緑	7.5YR6/4にぶい緑	長石、石英 安息香(?)	壺	口縁部	
140	瀬田六原 表:ヨコナデ	不明遺構	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR5/5明赤褐	長石、石英 安息香(?)	壺	口縁部	
141	瀬田六原 表:ヨコナデ	不明遺構	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	長石、石英	壺	口縁部	
142	瀬田六原 表:ヨコナデ	不明遺構	2.5YR4/6赤褐	2.5YR4/6赤褐	長石、石英	壺	口縁部	
143	瀬田六原 表:ヨコナデ	不明遺構	2.5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	長石、石英 安息香(?)	壺	口縁部	
144	瀬田六原 表:ヨコナデ	不明遺構	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR5/8明赤褐	長石、石英	壺	口縁部	
145	瀬田六原 表:ヨコナデ	不明遺構	2.5YR6/6緑	2.5YR6/8緑	長石、石英	壺	口縁部	
146	瀬田六原 表:ヨコナデ	不明遺構	7.5YR5/4にぶい緑	7.5YR6/6緑	長石、石英	壺	口縁部	
147	瀬田六原 表:ナデ	不明遺構	2.5YR4/6赤褐	2.5YR4/6赤褐	長石、石英 長葉藻	壺	口縁部	
148	瀬田六原 表:ナデ	不明遺構	5YR5/4にぶい赤褐	5YR5/2灰褐	長石、石英	壺	口縁部	
149	瀬田六原 表:ヨコナデ	不明遺構	10YR6/8赤褐	7.5YR4/7灰褐	長石、石英	壺	底部	
150	瀬田六原 表:ヨコナデ	不明遺構	2.5YR6/8緑	5YR6/6緑	長石、石英	壺	底部	
151	瀬田六原 表:ナデ	不明遺構	7.5YR5/6緑	7.5YR6/6緑	長石、石英	壺	底部	

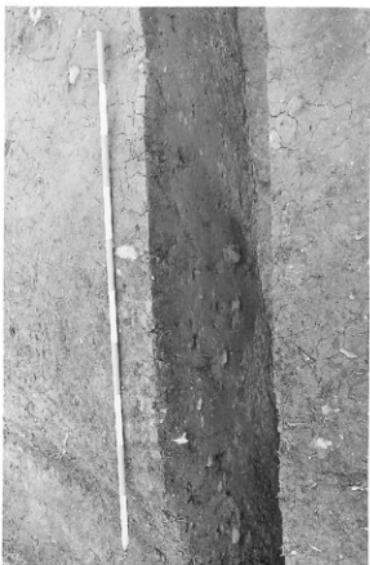
Tab. 8 土器観察表④

報告番号	調査地区	遺構	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	器種	石材	備考
13	不採	S D 3	—	104	77	41	576	瓶		
36	不採	S D 4	—	51	11	10	9.4	片岩	方解石	實物
125	瀬田大原	1号塗	下層	127	65	30	410	瓶		
126	瀬田大原	1号塗	下層	115	39	4	21.4	石錠	實物	刃部内側・両面研ぎだし

Tab. 9 石器観察表



Pho. 6 池田大原地区 基本層序



Pho. 7 池田大原地区 1号塗土層断面



Pho. 8 池田大原地区 1号塗完掘状況



Pho. 9 池田大原地区 2号塗土層断面



Pho. 10 池田大原地区 2号濠および不明遺構完掘状況



Pho. 11 池田大原地区 作業風景



Pho. 12 不條地区 S×2遺物出土状況



Pho. 13 不條地区 作業風景

長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所、 池田大原地区1号溝下層の放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素(¹⁴C)の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去の大気中の¹⁴C濃度は一定ではなく、年代値の算出に影響していることから、年輪年代学などの成果を利用した校正曲線により¹⁴C年代から曆年代に換算する必要がある。

2. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No 1	池田大原地区、1号溝下層	炭化物	acid/alkali/acid	AMS

acid/alkali/acid : 酸-アルカリ-酸洗浄

AMS : 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

3. 測定結果

試料名	測定No (Beta-)	未補正 ¹⁴ C年代 (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	¹⁴ C年代 (年 BP)	曆年代 Calendar Age (2σ : 95%確率, 1σ : 68%確率)
No 1	228485	2050±40	-26.3	2030±40	交点 : Cal BC40 2σ : Cal BC160~AD60 1σ : Cal BC60~AD10

BP : Before Physics (Present), Cal : Calibrated, BC : 紀元前, AD : 紀元後

(1) 未補正¹⁴C年代

試料の¹⁴C/¹²C比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は5730年とされているが、国際的慣例により Libby の5568年を用いて計算している。

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比 (¹³C/¹²C)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分儀差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正する。

(3) ¹⁴C年代

¹⁴C測定値により同位体分別効果を補正して算出した年代。曆年代校正にはこの年代値を使用する。

(4) 历年代 (Calendar Age)

^{14}C 年代を実際の年代（歴年代）に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを校正する必要がある。校正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値およびサンゴの U/Th (ウラン／トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された校正曲線を使用した。IntCal 04 では BC 24050 年までの換算が可能である（樹木年輪データは BC 10450 年まで）。

歴年代の交点は、 ^{14}C 年代値と校正曲線との交点の歴年代値を示し、 1σ (68% 確率) と 2σ (95% 確率) は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した歴年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

4. 所 見

加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定の結果、池田大原地区 1 号溝下層の炭化物では、 2030 ± 40 年 BP (2σ の歴年代で BC 160 ~ AD 60 年) の年代値が得られた。

【文献】

- Paula J Reimer et al., (2004) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26.0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.
尾崎大真 (2005) INTCAL98 から IntCal04へ. 学術創成研究費弥生農耕の起源と東アジア No 3 - 炭素年代測定による高精度縄文体系の構築-, p.14-15.
中村俊夫 (1999) 放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p.1-36.

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき						
書名	原の辻遺跡						
副書名	主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書						
巻次	⑤						
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書						
シリーズ番号	第37集						
編著者名	林 康広						
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所						
所在地	〒811-5322 長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触1092番地1 TEL0920(45)4080						
発行年月日	2008年1月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
原の辻遺跡	長崎県壱岐市 芦辺町・石田町	42423 42424	33°45'30" N 72°92'	129°45'35" E	2006.12.11 2007.03.20	〔不條〕 92m ² 〔池田大原〕 1,545m ²	主要地方 道勝本石 田線道路 改良工事

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	〔不條〕 濠 溝状遺構 土坑 〔池田大原〕 1号濠 2号濠 不明遺構 ピット群 〔原ノ久保A〕 環濠	弥生式土器 土師器 石器	

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第37集

原の辻遺跡

2008. 1. 31

発行 長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷 株式会社 昭和堂